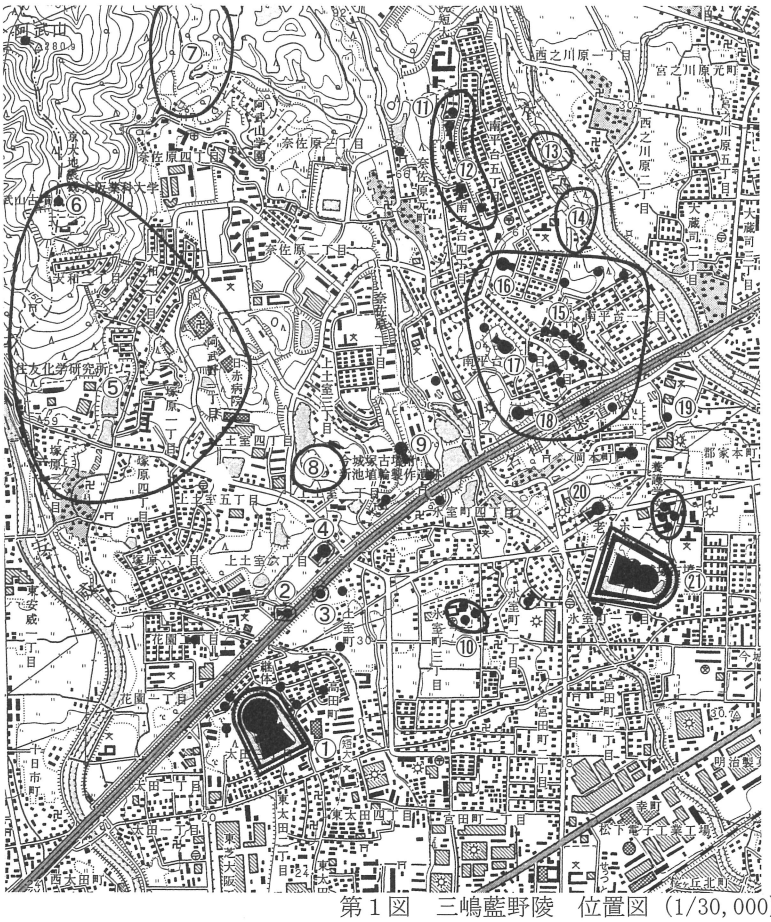
継体天皇　三嶋藍野陵墳塋裾護岸その他工事区域の調査

はじめに

継体天皇三嶋藍野陵は、大阪府茨木市太田３丁目に所在し、三嶋古墳群の一画を占める。この古墳群内には、古墳時代前期から後期にわたって前方後円墳が築造されるが、本陵は前方部を南に向ける大形前方後円墳であり、盟主的な位置を占める古墳であるといえる（第１図）。

この三嶋藍野陵は、墳丘裾が経年の波浪による浸食と崩落が進み、崖状ないし急斜面になってきており、墳丘裾の保護のため布団籠による護岸工事が計画された。これに先だって施工予定地における遺構・遺物の存否とその実態、及び工法の検討に必要な所見を得ることを目的とした発掘調査を実施した。

調査は平成14年10月28日から着手し、同年12月10日に終了した。その間、坪井清足・中野泰雄両陵墓管理委員にはそれぞれ考古学・土木工学の立場から現地を検分いただき、指導を賜った。墳丘裾部に散乱している石材については、奥田尚氏に鑑定いただいた。また、埴輪をはじめとする出土遺物については、高槻市教育委員会森田克行氏よりご教示賜った。記して感謝申し上げる次第である。



1　継体天皇　三嶋藍野陵
2　継体天皇　三嶋藍野陵
　飛地ち号（二子山古墳）
3　土保山古墳
4　番山古墳
5　塚原古墳群
6　阿武山古墳
7　片ケ谷古墳群
8　新池埴輪製作遺跡
9　闘鶏山古墳
10　ツゲノ古墳群
11　墓谷古墳群
12　墓谷２号墳（弁天山Ｄ２号墳）
13　唐井谷古墳群
14　尼ケ谷古墳群
15　弁天山古墳群
16　弁天山Ｃ１号墳（大蔵司古墳）
17　弁天山古墳（弁天山Ｂ１号墳）
18　岡本山古墳（弁天山Ａ１号墳）
19　郡家車塚古墳
20　前塚古墳
21　今城塚古墳

第１図　三嶋藍野陵　位置図（1/30,000）
※国土地理院発行 1:25,000 地形図「高槻」（N1-53-14-7-3）より作成

1　トレンチの設定方法と基本的な層序

前方部正面西隅近くの墳丘裾部に第１トレンチを設け、以下反時計回りに約25m間隔で順次トレンチを30箇所設定した。その配置は第２図のとおりである。各トレンチは長さ５m×幅２m、または長さ５m×幅５mを基本としたが、調査状況に応じて適宜変更した。

調査した各トレンチにおける基本的な層序は次のとおりである。

Ⅰ層　表土。現墳丘上の表土であり、黒褐色を呈する腐植土である。

Ⅱ層　墳丘崩落土。このうちａ層としたものは、茶褐色の砂質土であり、現墳丘上にある崩落土である。ｂ層は第12・24トレンチを中心に認められた、Ⅳ層以前に堆積し、多くの埴輪片を含む層である。

Ⅲ層　濠内堆積土。このうちａ層とするものは表層近くの堆積土であり、ヘドロ状を呈し落ち葉やゴミなどを含む層と小礫や砂質からなる層が互層をなす新しい堆積土である。ｂ層とするものは地山を起源とする堆積土であり、やや粘質のある土層を示す。

Ⅳ層　浚渫土。濠を浚渫した際に盛り上げられた土層であり、第12・24トレンチで検出された灰褐色を呈する粘質土が該当する。

Ⅴ層　遺構内埋土。第３・24トレンチで検出された土坑の埋土。

Ⅵ層　原初の堆積層。第10・12・24トレンチのみで検出された土層であり、埴輪片などの本陵に伴う遺物のみを包含する。

Ⅶ層　墳丘盛土。このうちａ層としたものは茶褐色を呈する均質な土層であり、墳丘表面近くの盛土である。ｂ層としたものはａ層に比べて拳大の礫を含み、地山を削りだした土を墳丘盛土とした土層である。

Ⅷ層　地山。富田礫層に属する、堅固な地層である。含まれる礫は人頭大から拳大まで様々である。この礫層の下には砂質を示す地山層もあり、場所によって地山の違いも認められる。

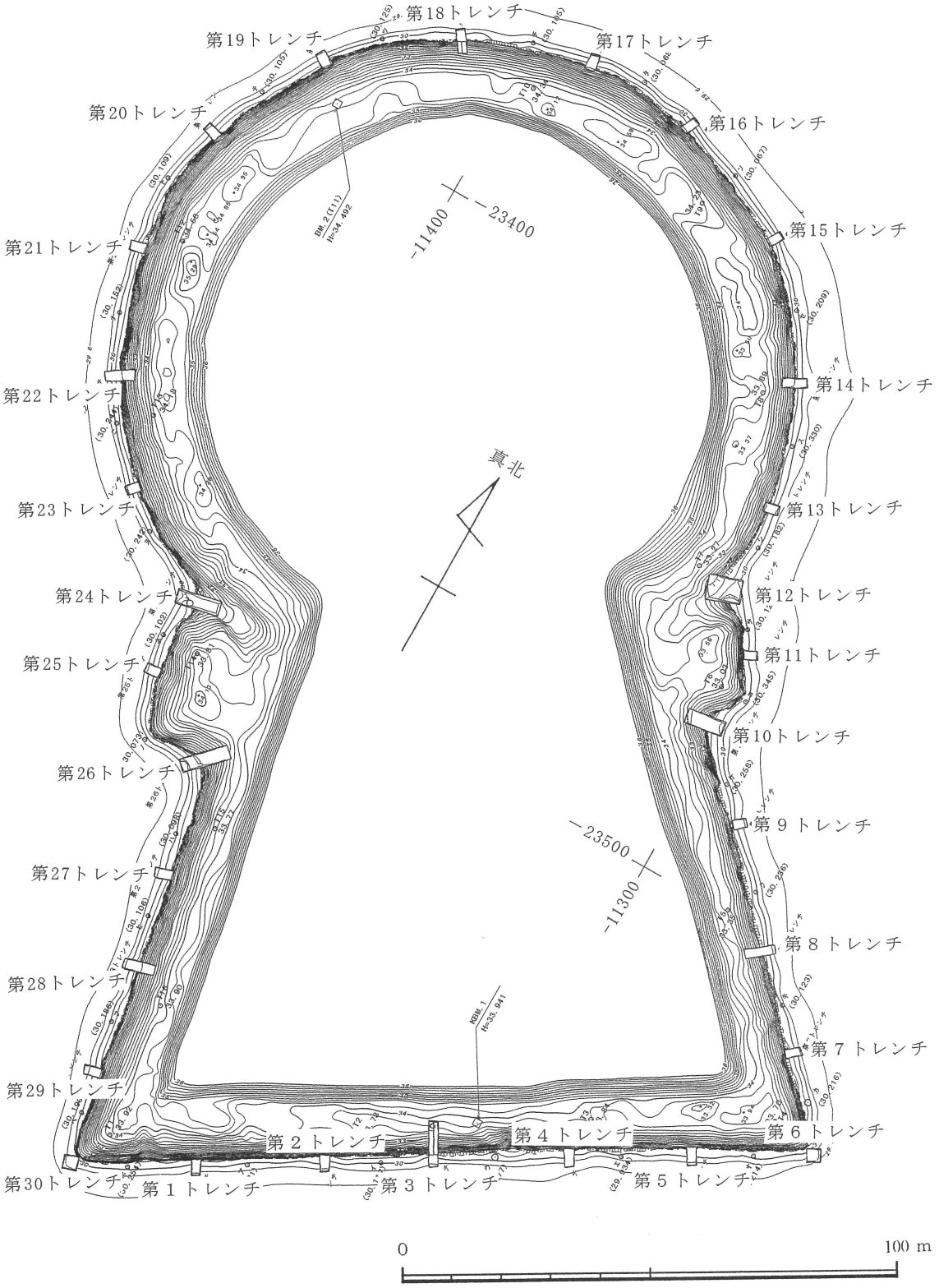
2　各トレンチの状況

墳丘裾部には、前述のように30箇所のトレンチを設定した。これらのトレンチを発掘調査したところ、くびれ部を除く各トレンチの状況は、ほぼ共通していると判断できるので、前方部と後円部の状況から記述する。そして最後に遺物の出土状況などが異なる、両くびれ部と造出部分についての状況を記述する。

（１）　前方部（第３図～第５図）

前方部には正面に第１～５トレンチ、前方部東側に第７～９トレンチ、西側には第27～29トレンチを設定し、隅角部分には第６・30トレンチを設定した。トレンチは幅２m、長さ５mを基本としたが、要所要所では墳丘部分にもトレンチを伸ばした。前方部隅角にあたるトレンチは、湧水が激しく、結果的に３m四方の発掘にとどまった。

まず前方部正面の状況であるが、発掘にかかる前の状況において、現墳丘裾部分に多数の礫が散乱していた。この礫が地山に含まれてたものが崩落した結果であるのか、第１段斜面に葺石が



第２図　三嶋藍野陵　調査箇所位置図(1/1,250)

縦横距原点　陸地測量部二等三角点鷹峰

あり、その葺石が落下したものであるのかを判断する必要があった。そのため前方部正面のほぼ中央に設定した第３トレンチにおいて、墳丘第１段テラスにかかるようにトレンチを設定して、発掘調査を行った。このトレンチの土層断面図を見ると分かるように（第３図３）、表土直下にⅦａ層とした墳丘盛土が検出され、葺石は認められなかった。念のため、後述する第10トレンチで埴輪列が検出された高さである標高32.8m付近までトレンチの東側半分を掘り下げたが、土層断面図でも明らかなように、この部分は墳丘の盛土であるⅦｂ層が確認され、葺石が少なくとも現状では存在していないことを確かめた。一方、トレンチの北端あたりに埴輪片が集中して認められたが、いずれも小破片であり底部の個体は出土していないことから、トレンチ内に埴輪列は残存していないと判断した。

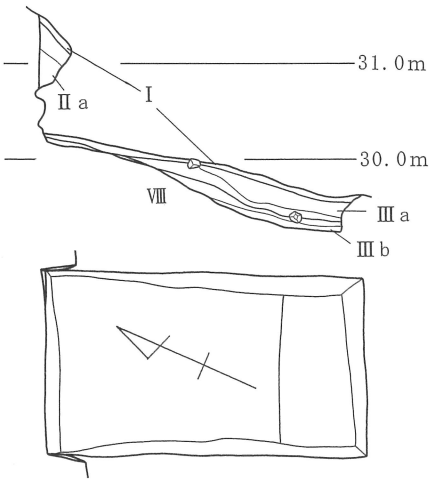
この第３トレンチでは埴輪片が集中した北端付近において、直径１m、深さ0.5mほどの土坑を検出した。図に示したように、埋土には拳大から子供の頭程度の礫が床面まで放り込まれたような状態で出土し、摩耗した小さな埴輪片が数点包含されていた。埴輪片以外に出土遺物がなく、よってこの土坑の所属時期は不明であるが、少なくとも墳丘築造時まで遡るものではないと判断できる。

濠側の状況は、現在の水涯線付近の、標高31m付近に地山と盛土の境界線が見られ、現墳端あたりでは地山が露出している。地山は先述したように富田礫層に属するため、人頭大以下の大小様々な礫を含んでおり、墳丘裾に転落している礫は本来地山に含まれていたものが、この部分の地山が浸食された結果小礫を含む土砂だけが流出し、比較的大きな礫のみが残されて現状を呈する可能性が高いものと考えられる。濠内には地山が流出して堆積したⅢｂ層が確認されたが、標高29.4m付近において現濠底に至る、傾斜が緩やかになる状況が観察された。

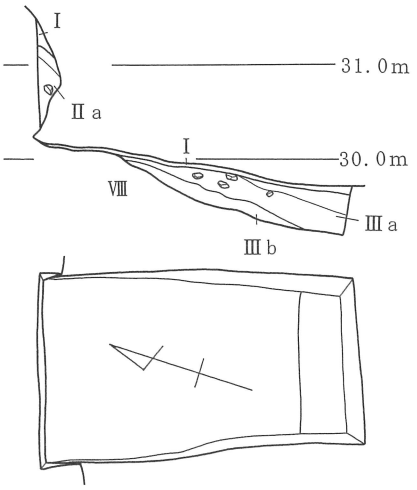
その他の前方部正面に設定した各トレンチの状況も、この第３トレンチと同じ状況であると判断できる。すなわち、濠内の土層断面はいずれもⅢａ層とⅢｂ層からなり、標高29.2±0.2mほどのところで傾斜が変化している。各トレンチとも濠内からはほとんど遺物が出土せず、出土品は表面採取したものを含めても、後述するくびれ部の各トレンチと比較した時極めて少ないといえる。このように遺物の出土量が少ないことと、各トレンチともほぼ同じ高さで現濠底の傾斜が変化していることと、さらには原初の堆積層と判断できるような土層が存在していないことから、本陵の濠はいずれかの時期に本来の濠底に達する浚渫がなされている可能性が高いと考えられる。その時期を明らかにするような遺物は出土しておらず、また、浚渫した土については、昨年度調査した白鳥陵のように広範囲に盛り上げるようなことはなされていない。しかし第12トレンチなどくびれ部分には浚渫土と考えられる土層(Ⅳ層)が確認されており、浚渫がなされている可能性が高いものと考えている。

続いて、前方部側面の状況を記述していく。東側には第７～９トレンチを設定したが、このうち第８トレンチを墳丘第１段斜面までのばして、葺石の有無を確認した。この第８トレンチの土層断面図は第４図８に示したとおりであるが、墳丘側においては、わずかな表土の下に薄く墳丘崩落土(Ⅱａ層)が堆積しており、その下にはすぐ墳丘盛土(Ⅶａ層）が検出された。よって、このトレンチでも葺石は存在しない可能性が考えられる。濠側の状況は正面に設けた各トレンチの

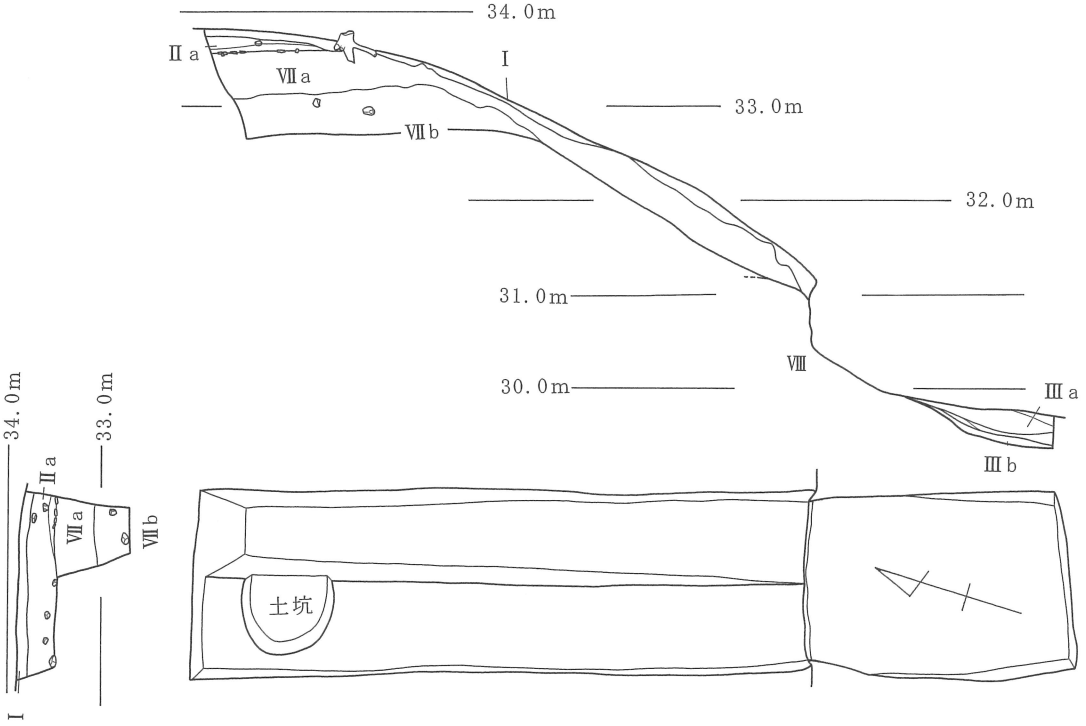
1　第１トレンチ



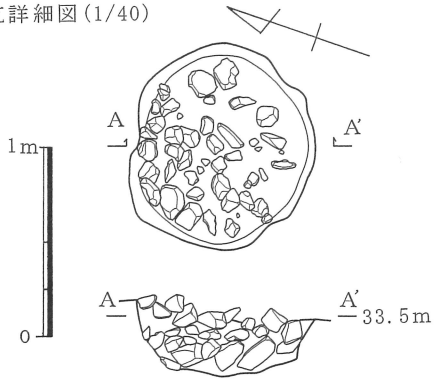
2　第２トレンチ



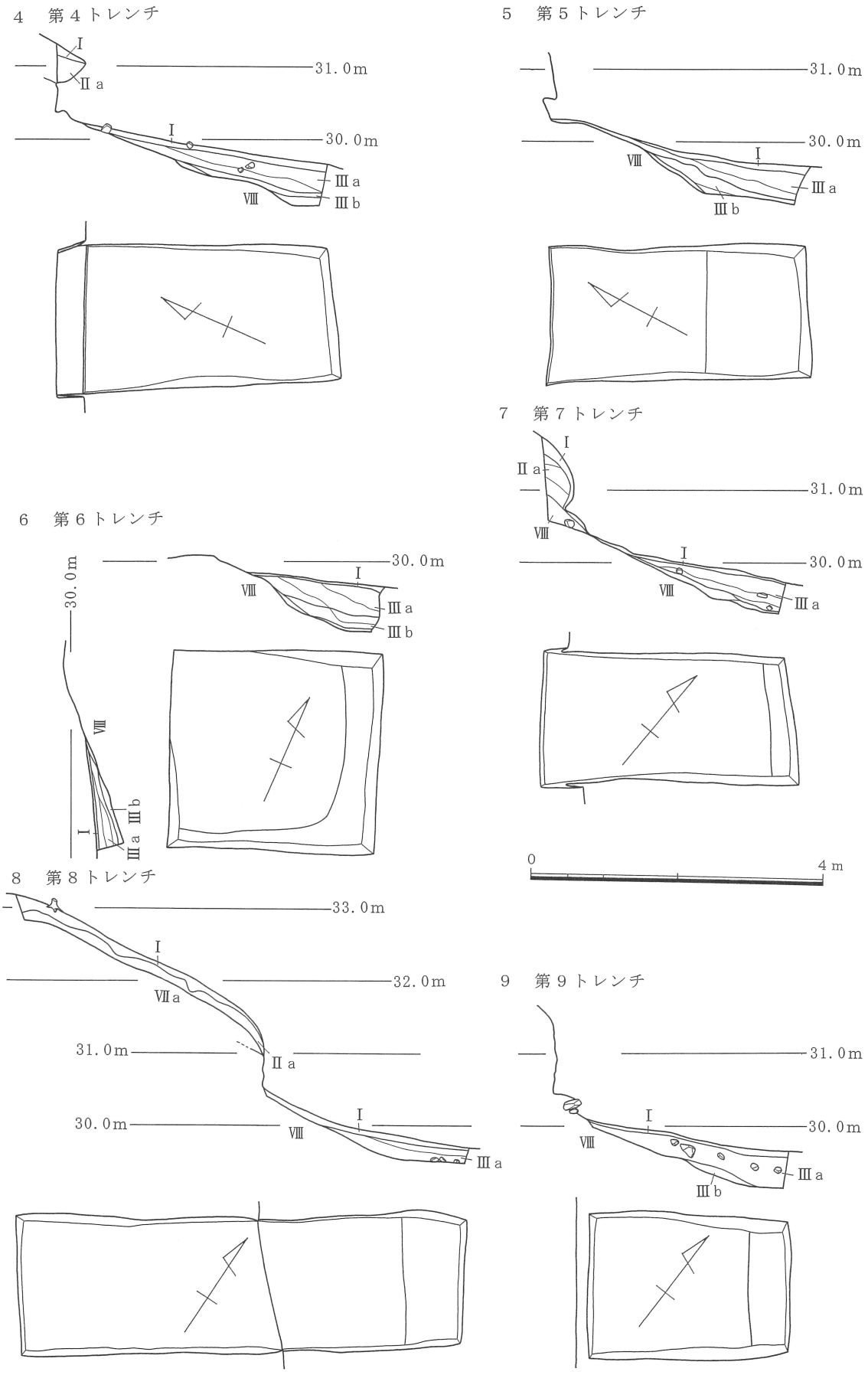
3　第３トレンチ



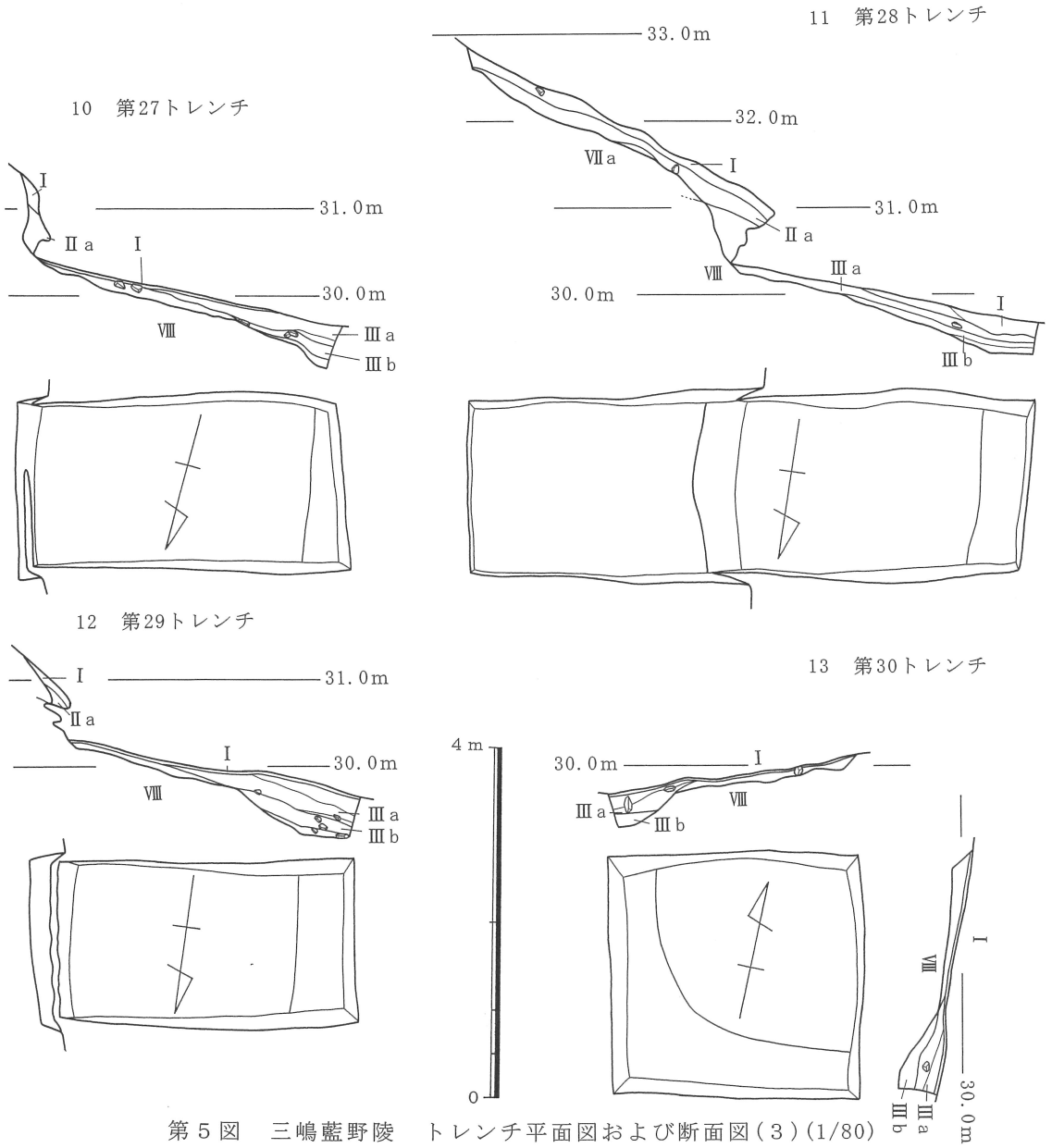
第３トレンチ検出
土坑詳細図(1/40)



第３図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図
および断面図（１）(1/80)



第４図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図（２）(1/80)



第５図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図（３）(1/80)

状況と一致し、現濠底に至る傾斜が緩やかになる標高も同様である。

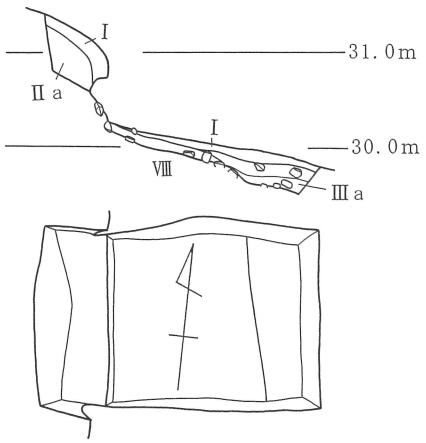
西側についても第27～第29トレンチを設定し、そのうち第28トレンチについては第１段斜面部分も発掘した。このトレンチの土層堆積状況も第８トレンチと一致する。すなわち表土の下に薄く墳丘崩落土(Ⅱａ層)があり、その下には墳丘盛土(Ⅶａ層）が検出され、葺石は認められなかった。濠側の状況についても、土層の堆積状況、及び現濠底の傾斜が変化する高さも同様の状況を示す。また、遺物がほとんど出土しないことも同様である。

第６トレンチと第30トレンチを設定した前方部の両隅角においても、基本的な土層の堆積状況は、他の前方部各トレンチと同様である。ただ、第６トレンチにはⅢｂ層とした土層に、黒褐色を呈する粘質土が認められたが、この土層も原初に遡るような堆積土とは考えられない。

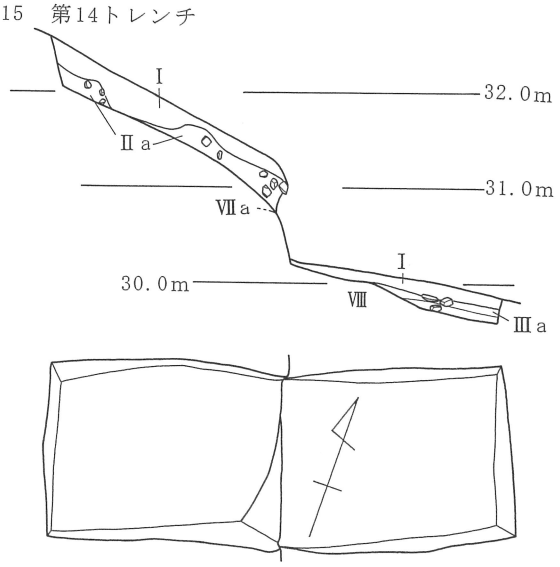
（２）　後円部（第６図・第７図）

次に、後円部各トレンチの状況を記述していく。後円部には第13トレンチから第23トレンチま

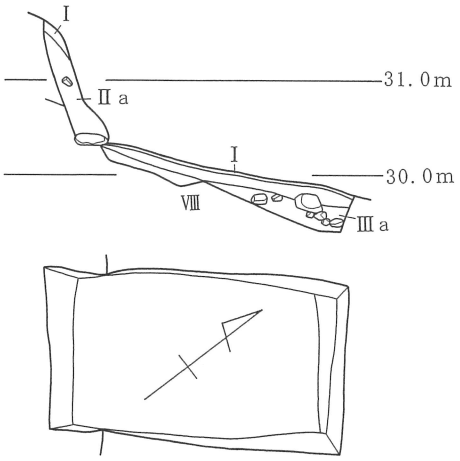
14　第13トレンチ



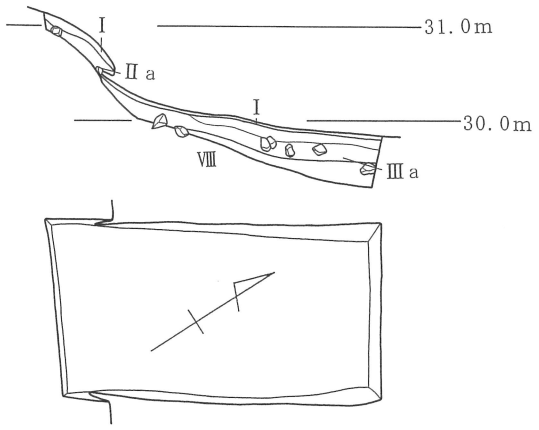
15　第14トレンチ



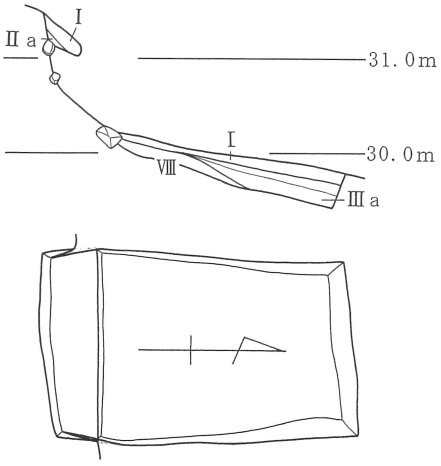
16　第15トレンチ



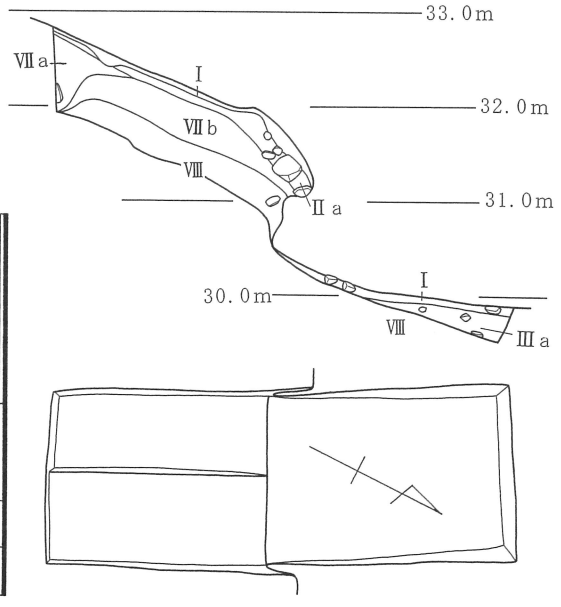
17　第16トレンチ

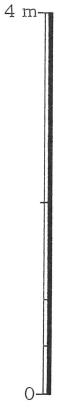


18　第17トレンチ



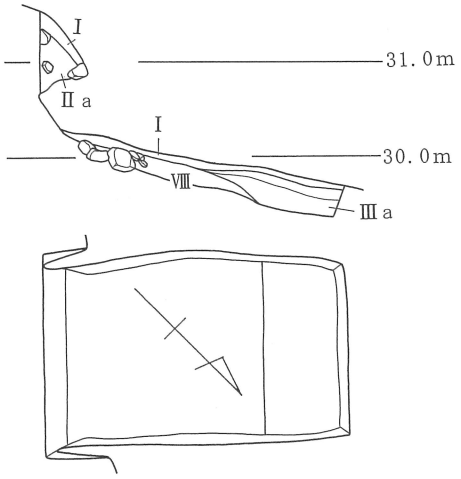
19　第18トレンチ



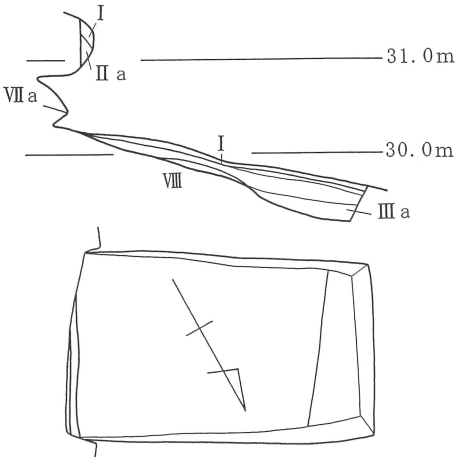


第６図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図（４）(1/80)

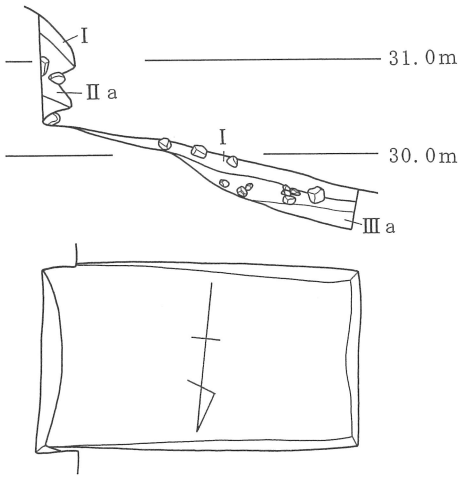
20　第19トレンチ



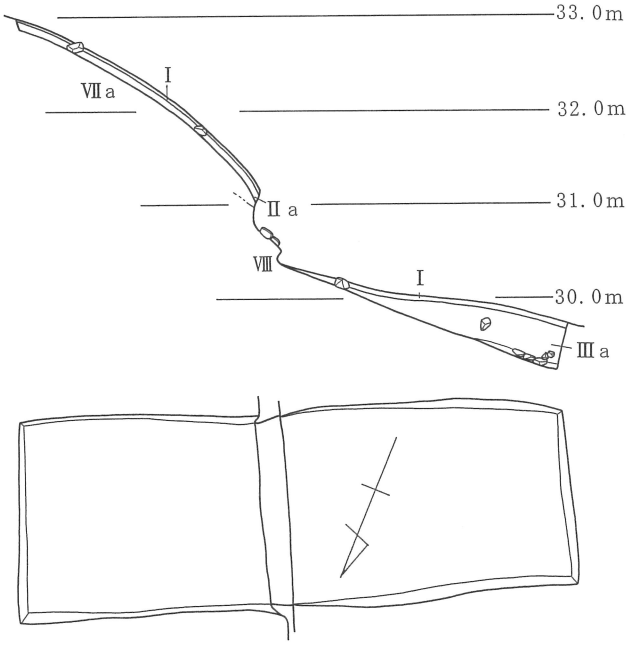
21　第20トレンチ



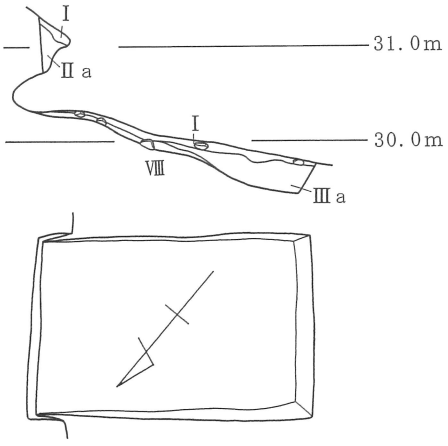
22　第21トレンチ



23　第22トレンチ



24　第23トレンチ



第７図　三嶋藍野陵
トレンチ平面図および断面図（５）(1/80)

で合計11箇所にトレンチを設定した。後円部側における発掘前の状況は、前方部に比べて大きな礫が墳丘裾に転落している。また、外堤部の高さを比較すると後円部側の高さが前方部より約2mほど高いことが分かる。これは本陵が、北側から延びる富田丘陵の南端に位置しているという地形的要因によるものと考えられる。

まず、後円部東側に設定した第14トレンチの状況であるが、第6図14に示したとおり表土(Ⅰ)、墳丘崩落土(Ⅱa層)、墳丘盛土(Ⅶa層) という前方部の各トレンチと同様の堆積状況を示す。墳丘崩落土には、やや大きな礫が混入しているが、これは現墳丘裾の状況とよく一致している。他のトレンチの状況も基本的に同様である。第18トレンチでは第1段斜面にかかるように設定し、また墳丘の構築状況を第3トレンチとの比較するために、トレンチの南側半分を断ち割り調査を実施した。その結果土層断面図に示したように(第6図19)、トレンチ内の墳丘寄りで、地山が墳丘斜面とは逆の勾配を呈するように掘り込まれていた。これは墳丘第1段目の墳丘は地山を削りだして整形し、その上に盛土を施す際に、盛土が流出しないための工法であると考えられる。このトレンチでも葺石は検出されず、本陵の第1段斜面には、前方部、後円部ともに葺石が施されていない可能性が考えられる。

後円部西側の各トレンチにおける濠内の土層堆積状況についても、前方部各トレンチの状況と同様である。特に地山面の傾斜が平らになる傾斜変換点の高さも、標高29.2±0.2mを示す。そして遺物もほとんど出土せず、このことは前方部と同様、後円部側においても濠内堆積土の浚渫作業がなされている可能性がある。

第22トレンチ（第7図23）は、トレンチが墳丘第1段斜面にかかるように設定した。結果的にわずかに堆積した墳丘崩落土(Ⅱa層)の下にすぐ墳丘盛土（Ⅶa層）が検出され、葺石は検出されなかった。

以上後円部の各トレンチの状況を記述したが、前方部と同様葺石などの遺構は確認されず、本来の墳丘裾を明らかにするような遺構も認められなかった。　　（徳田誠志）

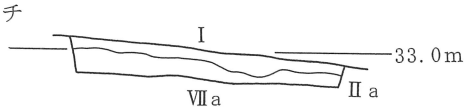
（3）くびれ部・造出（第8図～第11図）

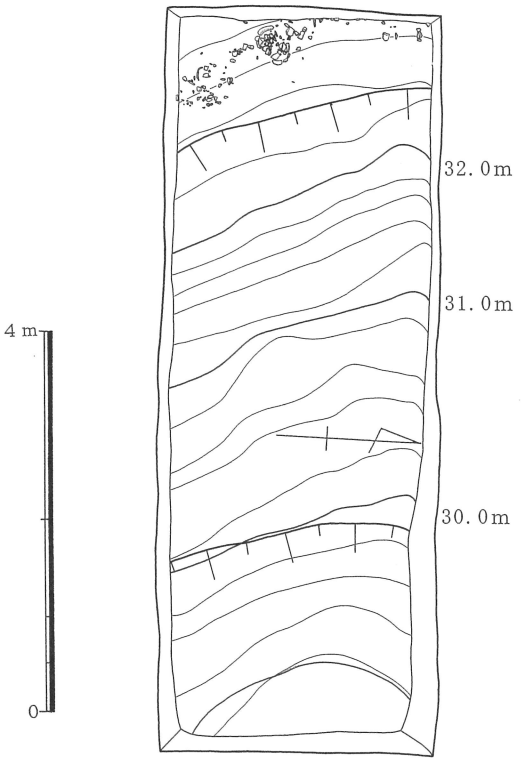
墳丘東側のくびれ部付近に設定した第10・11・12トレンチ、また西側の同じ部分に設定した第24・25・26トレンチについては、前方部・後円部として前述してきた各トレンチとは、原初の堆積土が確認できる箇所もあるなど、状況を異にするので、本項にまとめて記述しておく。

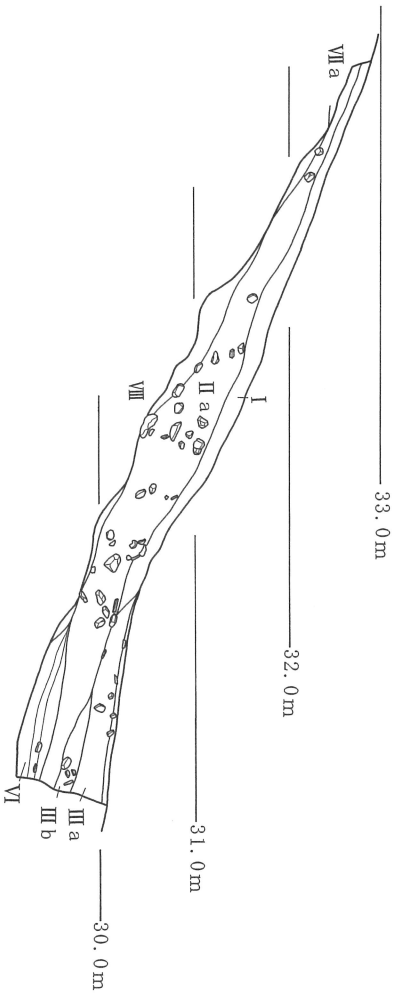
なお、第10・12・24・26トレンチの平面図は、地山整形による墳丘の形状を明瞭に示すために、等高線(20cm間隔)を加えて図化した。

第10トレンチ（第8図　図版2－1）東側造出と前方部との南側の接合部にあたる地点に設定した幅3m、長さ8mの、濠内から墳丘第1段平坦面へといたるトレンチである。表土（Ⅰ層）および現周濠内堆積土（Ⅲa・b層）下には、トレンチ全体にわたって墳丘崩落土が厚く堆積している（Ⅱa層)。このⅡa層は全体的に均質な上、大ぶりな埴輪片が含まれていることから、比較的早い段階に大きく崩れ落ちたものと推測される。濠内ではⅡa層下にさらに堆積土が認められ、原初の堆積層と考えられる（Ⅵ層)。他の多くのトレンチで確認することができないⅥ層が当トレンチに存在するのは、前方部と造出によってつくられた凹みの奥という位置が幸いし、後

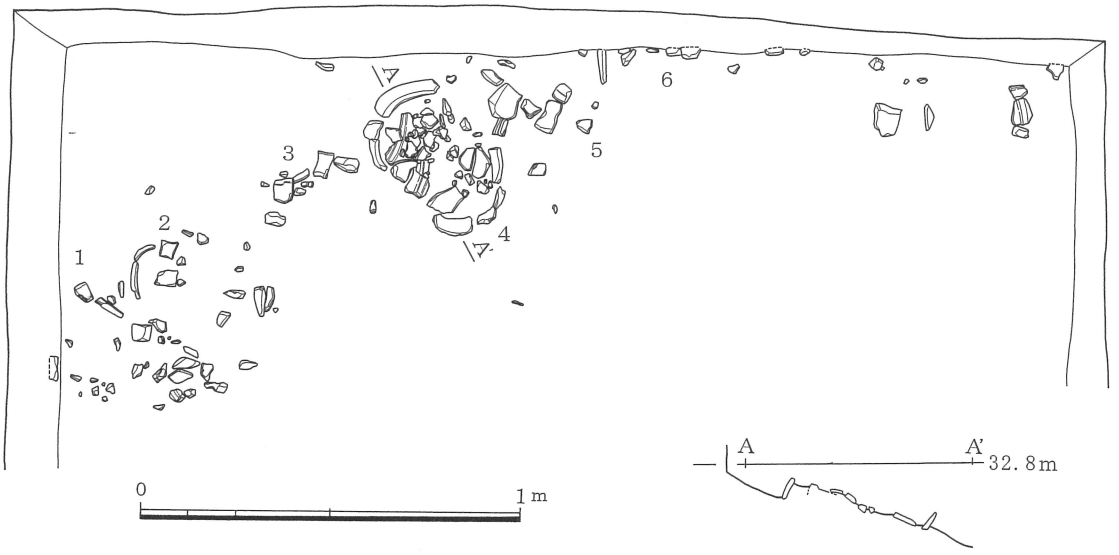
25　第10トレンチ







埴輪列出土状況詳細図(1/20)



第８図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図(６)(1/80)

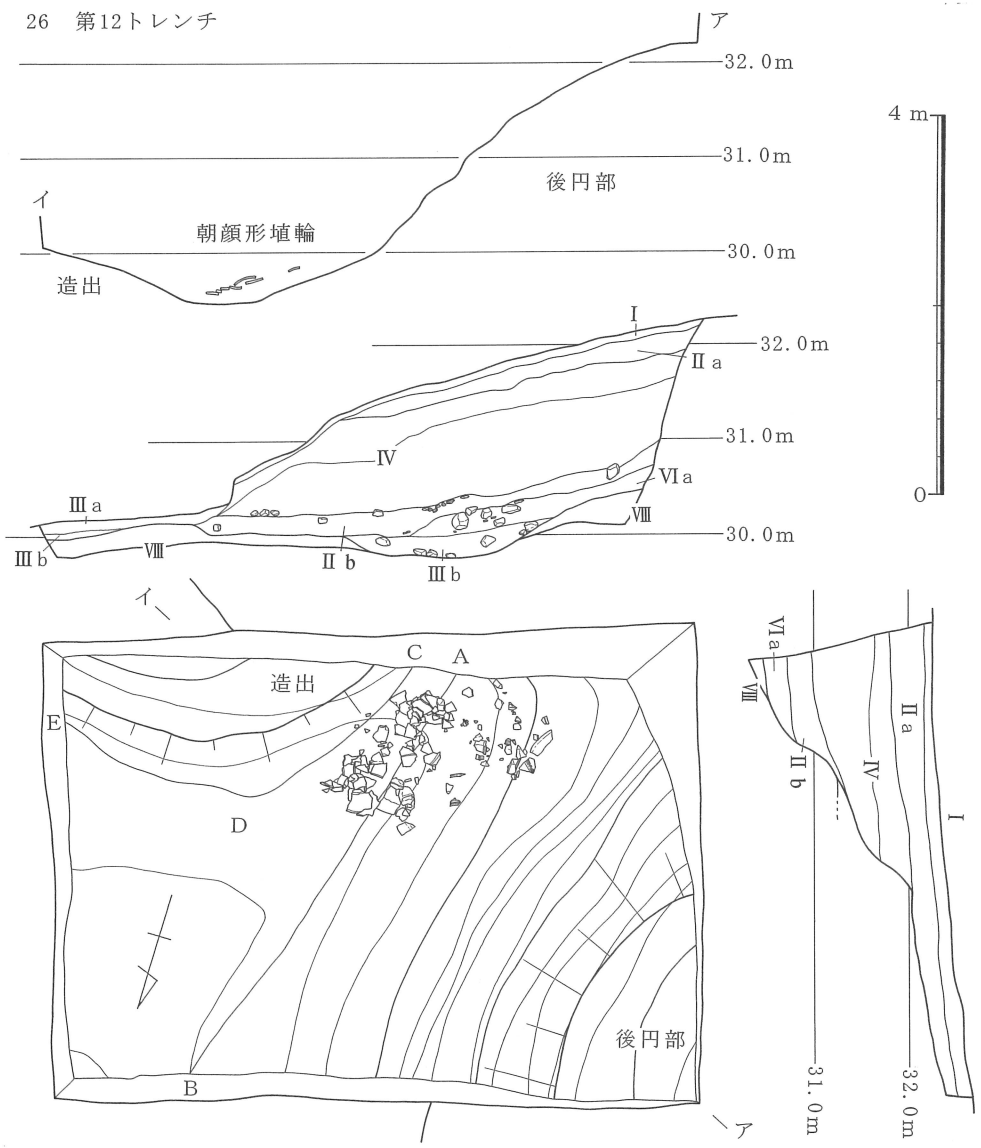
世の浚渫が及ばなかったためと思われる。濠内における地山（Ⅷ層）の立ち上がりは標高29.2m付近に認められる。Ⅵ層が存在することからも、この立ち上がりが本来の墳丘裾を反映している可能性は高い。検出した墳丘斜面での観察では、地山は標高32.4m付近で墳丘内に潜り込んでいく状況にあり、これ以上が盛土による築造部分である（Ⅶa層）。当トレンチにおいても第１段斜面に葺石が存在していたような痕跡は認めることができなかった。

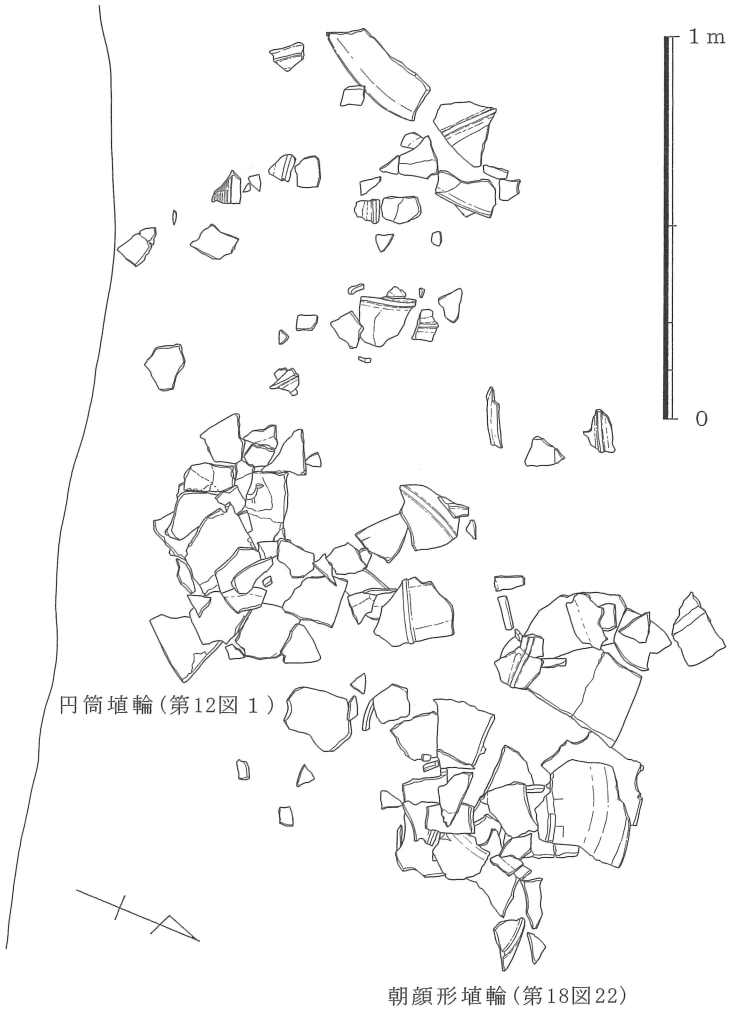
トレンチの上端西南隅部分で第１段平坦面の埴輪列を検出した。壁面にかかっているものを含め、確認できたのはおよそ６本分である（第８図）。埴輪列は、検出墳丘面における斜面と平坦面の傾斜変換線からおよそ0.5～0.8m内側、おおむね前方部斜面の等高線に沿う形で北西－南東方向に並んでおり、前方部側の平坦面に伴うものと判断される。検出段階では比較的良好と思われていた個体ですら残存高は５㎝程度で、原位置を保つ破片もほとんど無く、復原・図化することはできなかった。遺存状況が良好でないため当初の配列状況を明らかにし難いが、直径およそ25～30㎝程度の個体が芯々間30～40㎝程度で立て並べられていたものと思われる。埴輪が盛土上に立て並べられていたことは確実だが、列の周囲を精査したものの樹立のための掘り方を検出することは出来なかった。埴輪列の遺存状態の悪さは、周囲の墳丘が大きく流れ落ちていることを示唆しており、土層の状況とも一致するといえよう。（有馬　伸）

第11トレンチ（第11図）東側造出の正面に、長さ３m×幅２mの規模で設定した。基本的な土層の状況などは、前方部や後円部のトレンチと同様である。確認された土層はすべて濠内堆積土で、上２層がⅢa層に対応し、それより下層はⅢb層に対応する。埴輪の出土量は少ない。

第12トレンチ（第９図　図版１－１）東側くびれ部に長さ７m×幅５mの規模で設定した。まず土層の状況を見ていきたい。表土（Ⅰ）の下に、崩落土と考えられる砂質土が認められる（Ⅱa）。その下には0.8～１mにわたり、浚渫土と思われる粘質土（Ⅳ）が厚く堆積している。Ⅳ層上面は、後円部斜面と連続する面をなす。Ⅱa層堆積前に、墳丘も含めて多少の削平を受けた可能性がある。Ⅱb層は砂質土で、埴輪を大量に含むⅥa層（後述）に近い特徴を持っているが、含まれる埴輪片は全体的に小さく摩滅しているものが多い。原初の堆積土と考えられるⅥa層とは、形成された時期に多少の隔たりがあると思われる。Ⅵ層は、第９図に示した埴輪を含む層（Ⅵa）と床面直上に堆積した埴輪を含まない層（Ⅵb）に分けられる。Ⅵa層は、他のⅥ層と違い黒褐色を呈しているので、堆積後しばらく表土として露出していたことが考えられる。人頭大の礫を多く含む点も特徴的である。また、含まれる埴輪は、破片が比較的大きく摩滅が少なく、接合の結果、ある程度の大きさにまで復元できるものである。Ⅵb層は、狭い谷状地形を呈するくびれ部の床面直上に形成された厚さ20㎝ほどの堆積土で、埴輪片をほとんど含まない。Ⅵa層とⅥb層は形成されるまでに若干の時間差があったと考えられる。これらのことから、Ⅵ層は築造後間もない、樹立された埴輪がそれほど破損していない時期に墳丘の一部が流出した（Ⅵb）後、若干の時間をおいて、くびれ部テラス面の一部が埴輪を巻き込む形で崩落した結果形成された（Ⅵa）、原初の堆積土と考えることができよう。築造当時、濠水があったことを示す痕跡は認められない。

次に、くびれ部の地形について、埴輪の出土状況と絡めながら述べておきたい。平面図（第９図）に示したように、後円部第１段斜面と造出の斜面を検出したが、くびれ部床面はさらに調査





埴輪出土状況詳細図（1/20）

第９図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図（７）（1/80）

区外を奥へと伸びる。A-Bが後円部の裾で、C-D-Eが造出の裾である。造出の裾はDで屈曲し、現状で立ち上がりも顕著ではないため、濠水の浸食等で本来の形状は損なわれている可能性が高い。しかし、A-BとC-Dのラインは本来の形状と考えられ、互いに沿いつつ、濠側に向かって少しずつ広がる。床面は平坦ではなく、くびれ部奥から濠側に向かって緩やかに下降する。床面の幅は0.4～1.1m程度で、巨大な墳丘に不釣り合いなほど非常に狭い谷状地形を形成する。また、後円部の裾と、検出範囲内での後円部最高所の比高は約2.7mを測り、くびれ部での後円部斜面は急峻である。後円部は、標高31.2m付近までが地山整形で、それより上は礫混じりではあるが、均質な黄褐色粘質土(Ⅶ)を使用し、堅緻な盛土となっている。葺石は他のトレンチ同様、確認されなかった。

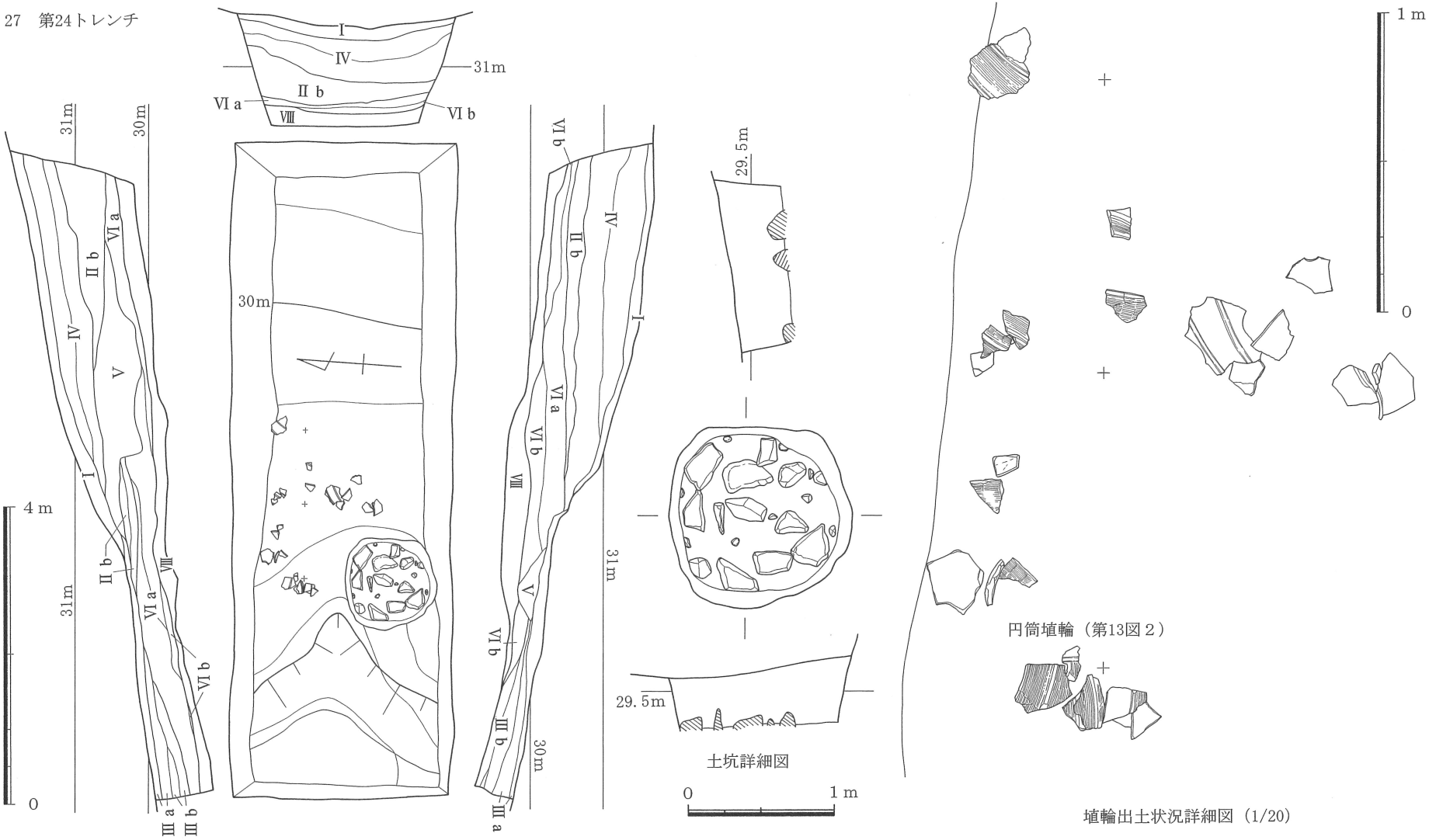
埴輪の出土位置は、大きく２つに分かれる。ひとつは床面が大きく広がった範囲(B-D-Eより濠側)のⅢb層から出土し、多量の礫と混在する状況だった。もうひとつは、第９図に示した、谷状地形に堆積したⅥa層から集中的に出土したものである。くびれ部という限られた範囲のためか、それぞれの層に同一個体と判断できる埴輪片を少なからず含む。Ⅵa層対応の埴輪は、くびれ部床面の傾斜に対応する形で、奥から緩やかに下るような状況で出土した。ある程度の大きさまで復元できるものの、底部まで判明するものは少ない。また、両者とも含まれる埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪が中心で、形象埴輪の破片は僅少である。

第24トレンチ（第10図　図版３－２）西側くびれ部に長さ９m×幅３mの規模で設定した。まず、土層の状況を見ていきたい。表土(Ⅰ)の下に、厚さ40～70cmにわたって灰色と暗灰色の粘質土(Ⅳ)が堆積している。東壁を見ると堆積状態は弓なりで、造出と後円部の斜面に挟まれた谷地形に堆積したことが容易に推察される。その下には、礫と埴輪片を大量に含む黄褐色粘質土(Ⅱb)が認められるが、北壁と東壁で厚く、南壁に向かって薄くなっていることから、後円部側の墳丘が崩落し、堆積したと考えられる。また、北壁には土坑の埋土(Ⅴ)が確認された。切り合い関係を見ると、Ⅱb層はこの土坑を挟んでいることから、一気に形成されたのではなく、若干の時間経過の中で、段階的に形成されたと考えられる。濠内堆積土(Ⅲ)は、幾度かの滞水時期の存在を示しているが、築造当時、濠水があったことを示す痕跡は認められない。

最下層として確認されたのが原初の堆積土(Ⅵ)である。第13・14図に示した埴輪が出土した層である。さらに６つに分層できることから、同じ原初の堆積土でも、多少の時間差を反映しているとみられる。埴輪は、くびれ部奥での出土は少なく、その多くが濠に近い位置から出土したが、全体に大形で残りの良好な破片が多い。また地山直上ではなく約20cmほど浮いた状態で出土した。床面直上で大きな破片が出土しない点は、第12トレンチの状況と同じである。円筒埴輪が中心で、第12トレンチ同様、形象埴輪は僅少である。また、床面に貼り付くような状況で薄い炭化物層が検出された(Ⅵb)。南壁Ⅵa層中からは、第21図40に示した須恵器壺の破片が集中して出土している。造出上に置かれていたものが転落し、破砕したものであろう。

くびれ部床面は、地山(Ⅷ)を整形したものである。床面自体は濠側に向かって緩やかに下っていく。トレンチ西端付近ではやや深く掘り込まれた箇所が認められたが、埋土が濠内堆積土(Ⅲ)のみであることから、この掘込みが築造時の地形である可能性は低い。

27　第24トレンチ



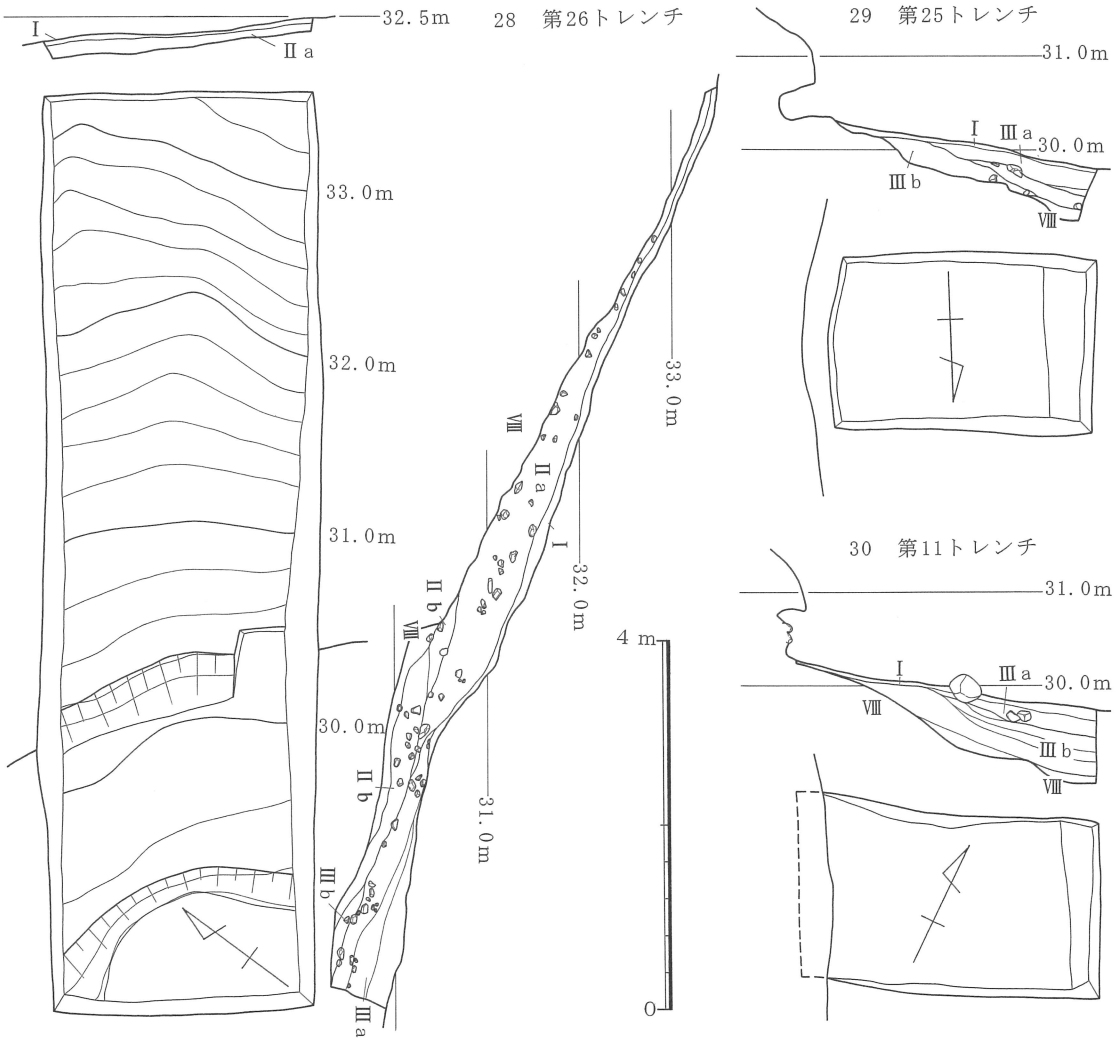
第10図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図・断面図（８）（1/80）および土坑詳細図（1/40）

また、上記の掘込みに接して径1.2mのほぼ円形の土坑が検出された。湧水がひどく完掘には至らなかったが、壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、人頭大あるいはそれを超える大きさの石が充填されたような状態で出土した。掘り込み面はⅢb層上面であり、新しい時期のものと考えられるが、出土遺物は埴輪のみである。

当初、第12トレンチの状況を受け、本トレンチでもくびれ部は幅の狭い谷状地形として検出されると想定していた。しかし、結果的には造出側(南壁)で地山の立ち上がりを一部検出した以外は、顕著な墳丘の立ち上がりは認められず、東壁の堆積状況から、後円部斜面の立ち上がりがトレンチのわずか外にあると想定できるにすぎない。本トレンチは図らずも、くびれ部床面にきれいに収まっていると思われる。第12トレンチのくびれ部より床面幅が広く、左右のくびれ部形状が厳密には対照でないことを指摘できよう。

なお、他のトレンチ同様、葺石は確認されなかった。

第25トレンチ（第11図）西側造出の正面に、長さ３m×幅２mの規模で設定した。基本的な土層の状況などは、前方部や後円部のトレンチと同様である。確認された土層はすべて濠内堆積土で、上３層がⅢa層で、それより下層がⅢb層である。埴輪の出土量は少ない。



第11図　三嶋藍野陵　トレンチ平面図および断面図（９）(1/80)

第26トレンチ（第11図）西側造出と前方部との屈曲部に長さ10m×幅３mの規模で設定した。まず土層の状況をみていきたい。最大の深さは裾付近で約0.9mであるが、全体に浅い。墳丘斜面を表土（Ⅰ）が薄く覆い、表土の下に、ほぼ同じ範囲で墳丘崩落土（Ⅱ）が認められる。この崩落土は、墳丘斜面を覆う上層と、裾部にのみ認められる下層に分けられる。両者は直接重なるため、堆積の時間幅は不明だが、上層は全体に締まりのない土層で、含まれる埴輪片もやや摩滅したものが多い。一方、下層は非常に堅緻で、含まれる埴輪片も状態の良いものが多い。原初の堆積土と特定はできないにしても、比較的古い時期に形成されたことが推定される。以上の特徴と第12・24トレンチの状況を考え併せると、上層がⅡa、下層がⅡbである可能性が高い。崩落土を取り去ると、その下に地山（Ⅷ層）が一面に検出された。濠内堆積土は４層に分けられるが、上３層がⅢa層、下１層がⅢb層であると考えられる。

出土遺物は埴輪が中心で、第10・12・24トレンチ同様、出土量は多い。しかし、確実な原初の堆積土がないためか、破片の大きさは比較的小さく、接合する破片も少ない。また、円筒埴輪の破片が多く、形象埴輪の破片はほとんど認められない。

本トレンチは、裾から墳丘第１段斜面上端に及ぶ範囲に設定したが、葺石は確認されなかった。造出と前方部との屈曲部にあたるため、地山整形によるコーナーの形状が明確に検出されることが期待されたが、本来の斜面が流出してしまったためか、明瞭な形状は確認されなかった。

（清喜裕二）

３　出土遺物（第12～21図、図版６～９）

今回の調査で、各トレンチから破片数で8、815点が出土した。大半が埴輪片であり、若干の須恵器、土師器が出土した。

埴輪の大半は、円筒埴輪で、朝顔形埴輪と形象埴輪の割合は極めて低い。また、出土箇所は、くびれ部や造出に設定した第10・12・24・26トレンチを中心としている。他のトレンチからの出土量は少なく、その差が際だっている。特に第12・24トレンチは全形の判明する資料が含まれるなど、質量とも他のトレンチを凌駕している。また、出土埴輪は、本陵の北東に位置する新池窯で焼成されたことが判明している。

埴輪全体の様相であるが、窯焼成のため、無黒斑の資料で占められる。灰色～青灰色を呈する、いわゆる須恵質の個体は、極めて少なく、多くは、比較的堅緻で硬質な仕上がりの個体が多い。しかし、完形の資料が少ないため、明確ではないが、底部まで焼きムラがなく仕上がっているもの以外に、上半部の焼成が良好であるのに対し、下半部が焼成不良で軟質の個体も少なくない。また、円筒埴輪を中心に、赤色顔料を塗布した個体が多い。赤色顔料については、既に新池遺跡の報告書[1]に詳しいが、本陵の埴輪に塗布されたものも、色調・塗布の痕跡など、新池遺跡のものと同様である。特に、塗布の仕方は特徴的で、ハケというよりは、箒状の工具を用い、その動きがわかるほど、かなり強く、荒く施している。赤色顔料の飛沫も顕著に残っている。

円筒埴輪は、全形の残る個体などから判断して、４条５段構成と考えられる。外面調整はヨコハケを基本とするが、その様相は多岐にわたる。内面は、口縁部付近を除き、最終的に指ナデを

施す例が基本的な在り方である。突帯接合後にヨコハケを施す例は少ない。突帯間隔は、胴部である２段目～４段目に12～13cmのものが多く、数値としては比較的安定しているが、底部である１段目と口縁部である５段目は、胴部の間隔より広い個体もあれば、狭い個体もあるなど、ばらつきが認められる。

以下に、今調査で出土、あるいは表面採集した資料のうち、主なものについて、個別の記述を進めていきたい。図示した各資料の出土トレンチ・採集箇所は、番号の横に括弧で括って示した。

（清喜裕二）

（１） 埴輪

円筒埴輪（第12図１～第17図21）

以下の文中では、段や突帯については現状で判明するものを下から数えたもので、左右の表現については内外面ともすべて遺物に向かってのものである。また、突帯間隔は突帯の上面を基準にしている[2]。

１は第12トレンチ出土のもので、口縁部を含む上半部のみ遺存する（図版６－１）。１段目はほとんど残存していないが、２段目～４段目は大部分が残る。残存高はおよそ40cm。径は１条目突帯直下でおよそ28cmを測る。透孔は１段目と３段目に認められる。両段とも２個の円形透孔が対向するように穿孔され、１段目と３段目とで穿孔方向が直交する。口縁部は直口で、端面は水平方向を向く。端部周辺にはナデが認められるが、内面側にはハケメ状の擦痕が残る。

突帯は断面台形。上面・端面は丁寧にナデが施されているが、下面はやや弱く、器壁との間に段差が残される部分が多い。突帯が器壁ごと脱落している部分が多く、設定するための工具痕などは観察できない。突帯間隔は２段目でおよそ12.5cmであるが、３条目と４条目の突帯が大きく歪むため、３段目はおよそ12.5～13.5cm、４段目はおよそ15.5～16cmとなっている。

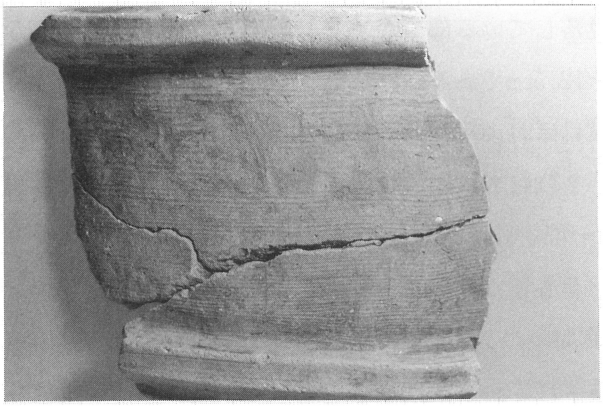
外面調整は、１段目・２段目ともヨコハケ。２段目では垂直方向の静止痕を確認でき、一瀬氏分類のBc種に該当するものと思われるが[3]、一部を除きストロークが長く、静止痕を持たない部分の方が長い。３段目では左傾気味のタテハケもしくは板ナデとみられる１次調整を確認できる。２次調整はヨコハケで、垂直方向の静止痕間隔は５cm程度。Bc種にあたる。口縁部にあたる４段目では上半と下半とでヨコハケが２段施されており、下段を一周してきたハケメが上段へと上がっていく部分や上段ヨコハケの終点などが認められる。静止痕は垂直方向である。

内面は、１段目から２段目の下位にかけては縦方向、２段目下位から中位にかけては左上がりの指ナデが認められる。２段目中位以上もナデであろうが赤彩のため不明瞭である。３段目上位付近と４段目中位付近に粘土紐の接合痕が比較的多く認められる。

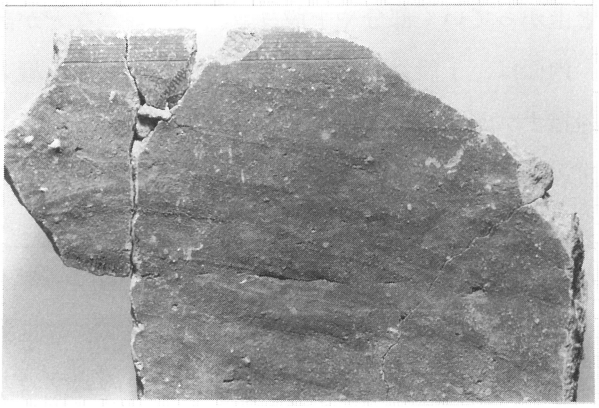
外面および内面には赤色顔料が塗られている。その範囲は外面が口縁部から２段目まで、内面が口縁部から２段目中位までで、顔料は各突帯の下面にも塗られていたようである。外面のそこかしこにはハケメとは明らかに異なる条痕が散見されるが、それが顔料を塗布する際に用いられた工具痕と思われる。この工具痕と顔料のムラの方向は、塗布がヨコ方向の動作を基本として行われたことを示しているが、ところにより上方や下方へのカーブが認められる。現在は、外面が暗褐色～褐色、内面では暗赤紫色を呈している。

鹿線刻（スケールは1/3）

1（12）



３段目外面調整



４段目（口縁部）内面調整

第12図　三嶋藍野陵　出土品実測図（１）円筒埴輪（1/4）

赤彩部分以外は黄白色で胎土には径２～８㎜程度の小礫が多く含まれている。

４段目外面には動物形の線刻が認められる（図版６－２）。長めの首を持つ４本足の動物で、頭部を右に向けている。首部と胴部は２本の曲線を用いて表現される。首部後側～胴部上側の線は、「Ｊ」の字を書くように縦方向から小さく下向きの弧を描いた後、上向きの弧に転じる。首部前側～胴部下側の線は、後側線より1.5㎝下方から始まり、大きく下向きの弧を描く。尻にあたる部分で上下の弧が合わさることで、胴部は膨らみを持った表現になる。頭部は「ヲ」の字状に描かれているが、細かくみれば４本の線刻と２つの点からなる。１本目の線刻は首部後側線起点のすぐ右方を起点とし、右斜め下に2.5㎝ほど進んで４本目に切られて終わる。２本目は１本目と平行するようにその５㎜ほど下から始まるが、５㎜ほどですぐに途切れてしまう。３本目は２本目が途切れる部分のすぐ右側に起点を持ち、２本目の延長線上を1.5㎝ほど進んで、左下から来た４本目に切られて終わる。２本目と３本目は一本の線刻が飛んでしまっただけのものの様にも思えるが、両者の間は意識的に空けられており、ここでは一連のものとはしなかった。次は点で、２本目の５㎜ほど下の首部前側線起点に重なるように打たれている。その次も点で、前の点のすぐ右方に打たれている。こちらは実際には２～３㎜ほど工具が動いた痕跡があるので、線と認識するべきかもしれない。４本目の線刻は２番目の点のすぐ右側に始まるが、右斜め上方に緩やかな弧を描き、1.5㎝ほど進んだところで１本目を切って終わる。２つの点は一連のものとも考えられるが、２番目の点と４本目の線刻との間は意図的に空けられているように観察される。頭部の表現をまとめれば、１本目が頭部上半分の輪郭線で、４本目が下側の輪郭線と考えられる。顔の真ん中を横切る２・３本目、および下側の２つの点が何を表現したものなのかは不明である。１本目が首部の前方を起点とすることで首部後側線の上端は耳のようにも見える。４本の足のうち、前から３本目は割れ目に重なるため観察できないが、ほかの３本はそれぞれ１本の線で表現されている。尾の表現はない。各線刻の幅は１～３㎜程度。先に胴体を描いた後、頭部や足部を加えているものとみられる。また、線刻の輪郭が顔料塗布工具によってぼやける箇所があるので、描かれたのが赤彩以前であることは疑いない。

次に述べる２と透孔の配置や赤彩の範囲などを比較すると、本個体も４条５段構成であって、残存部分が本来の２段目～５段目である可能性が高い。

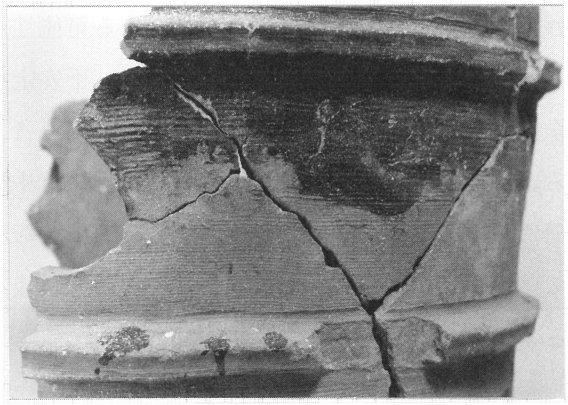
２は第24トレンチ出土のものである。不安定ながら底部から口縁部までが接合し、４条５段の全形を知ることができた（図版６－３、７－１）。全高はおよそ63㎝、底部径はおよそ29㎝を測る。透孔は２段目と４段目に認められ、個数や配置は１と同じである。口縁部は緩く外反し、端面は水平を向く。端部周辺はナデで、端部から2.0～2.5㎝ほど下には幅約５㎜の浅い凹線が走っている。底部の残存部には粘土板の接合痕が残っており、上からみて「Ｚ」字状に接合されていることがわかる。

突帯は断面台形で、部分的に断面方形に近い箇所もある。上面・端面は丁寧にナデが施され平滑になっているが、下面は粘土紐を撫でつけた際に生じた凹凸が目立つ。３条目の上面にＬ字形工具痕が認められる[(4)]。突帯間隔は、底部である１段目と２段目はおよそ12.5㎝を測るほか、３段目がおよそ11.5㎝、４段目がおよそ12.0㎝、口縁部である５段目はおよそ14.0㎝と、胴部に

鹿線刻（スケールは1/3）

2（24）

４段目外面調整



２段目外面調整

第13図　三嶋藍野陵　出土品実測図（２）円筒埴輪（1/4）

おいても均一ではない。

外面調整は、１・２段目において縦方向の板ナデかと思われる１次調整の痕跡を見ることができる。２次調整は各段ともヨコハケ。１段目のヨコハケは静止痕が垂直方向を向くBc種であるが、ストロークが長く、静止痕を30数cmも見いだせない部分がある。２段目もBc種ヨコハケである。こちらもストロークが長く、40cm近く静止痕を認めることができない。３段目は静止痕が右に傾くＢｄ種である。ここで静止痕を確認できる部分での間隔はおよそ12cm。４段目は上半と下半の２段のヨコハケが施されており、下段から上段へのハケメの上がりが認められる。一瀬氏分類のＢｂ種ヨコハケに近いが、残存部分には静止痕を観察することはできない。５段目はヨコハケを少なくとも２段は重ねている。この段でも下半部から上半へのハケメの上がりを確認できる。なお、３・４段目には指頭状圧痕が４～５個集中する部分がある。

内面にはほぼ全体にわたって左上がりのナデが施されている。粘土紐接合痕は少ないが、２段目上端付近、４段目中位付近、５段目中位付近には比較的多く認められる。粘土紐の太さは３cm程度である。

この個体も、外面が口縁部から２段目中位まで、内面が５段目中位まで赤色顔料が塗布されており、突帯下面にも認められる点も１と同様である。外面には工具痕と思しき条痕が散見される。彩色範囲内外を問わず飛沫や液だれの痕を見ることができるため、顔料はかなりの水分を含んでいたものと考えられる。透孔によって穿孔された面にも顔料が認められるため、塗布のタイミングは埴輪が完成した後であろう。現在の赤彩部分は暗赤紫色を呈している。

顔料が塗布されていない部分の色調は淡灰色を呈しており、いわゆる須恵質である。胎土には径２～10mmの小礫が多く含まれている。

この個体の口縁部にも動物形の線刻が認められる（図版７－２）。右を向く点、胴部が膨らみを持って表現される点、尾がない点、４本の足をそれぞれ１本の直線で表現する点など、全体的に１のものとよく似るが、細かくみると頭部の表現が若干異なる。頭部を構成する５本の線刻のうち、１本目は首の５mm後方を起点として右に進み、途中で首部後側線の始点をかすめ、１cmほどで終わる。その終点からすぐおいて２本目が始まり、右に５mm進んだ後右斜め下に1.5cmほど進む。１・２本目は一連のものと考えている。３本目は首の後方３mmの所を起点として１本目と平行に右に進み、首部前側線の起点のすぐ上を抜けていく。２cmほど進んだところでやや下方に転じ、１cmほどで２本目に接して終わっている。４本目は首部後側線上を起点とした後、右に１・３本目と平行に３cmほど進んで終わる。その終点は２・３本目の終点と揃えることを意識していよう。５本目は首部前側線を起点として４本目と平行に２cmほど進む。この終点も４本目と同様にほかと揃えているようである。１本目と２本目が頭部上半分の輪郭線で、首部前側線を起点とする５本目が下側の輪郭線と思われる。１本目と３本目の起点が首部より後方にある点が意識的と思え、１本目は耳を表現している可能性がある。１の例は１本、本例では２本であるが、顔を横切る線刻を持つことは共通する。各線刻の幅は１mm程度。胴体→頭部・足部という手順も１と同様である。

この動物が何かについては結論を得ていないが、有力な候補として考えているのは馬と鹿であ

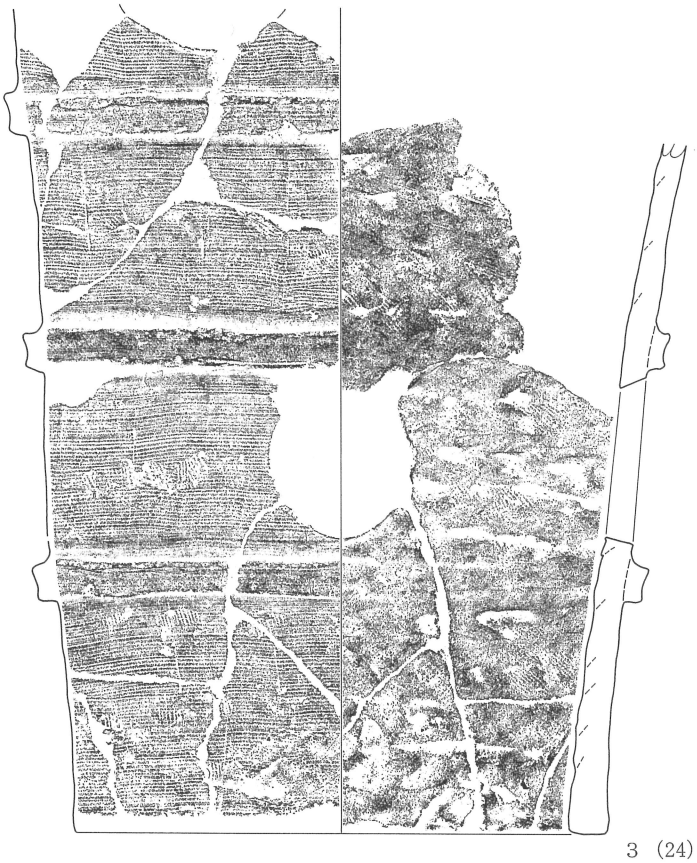
る。馬とする場合、１と２の両者に共通する顔を横切る線刻を面繋あるいは手綱と解釈することができる。しかし、ほかの馬具や鬣、尾の表現はない。埴輪に馬が描かれている例としては、大阪府土師の里遺跡府営道明寺南住宅地区のⅣ区円筒棺３を構成していた円筒埴輪がある(5)。土師の里例は円筒埴輪の胴部に描かれたものであるが、馬の胴部を１本の線刻で表現している点や人物が騎乗している点、手綱が馬の前方に引っ張られているような表現がある点などが本例と異なっている。鹿とする場合、膨らみを持つ胴部の表現が弥生土器にみられる鹿の線刻を想起させる。角が無い点についても牝鹿の可能性があるために否定材料にはならない。また、当陵の埴輪を生産したとされる大阪府高槻市新池遺跡でも鹿の線刻を持つ埴輪が出土しており(6)、同じく新池遺跡から埴輪の供給を受けたとされる同市今城塚古墳でも盾形埴輪に鹿が描かれている例がある(7)。一方、これまでに新池遺跡産とされる埴輪に馬の線刻が見出された例はない。しかし、新池例は角を持つ牡鹿で胴を１本の線で表現するものであるし、鹿とした場合、顔の線刻については十分な説明ができない。馬と鹿、いずれであるのかの決着は類例の増加を待ちたい。

３も第24トレンチからの出土品である。底部から４段目途中までの破片を接合することができた（図版７－３、８－１）。残存高はおよそ45cm、底部径はおよそ25cmを測る。透孔は２段目と４段目に認められ、１・２と同じ配置である。底部には粘土板の接合痕を認めることができ、埴輪を上からみて「Ｓ」字状である。

突帯は幅広の印象を与えるもので、断面は低平な長方形。上面・端面・下面とも丁寧にナデが施されている。３条目突帯では、上面近くの器壁に突帯整形後に付けられたハケメ状の擦痕が残されている。同じ突帯のほかの箇所では上面にＬ字形工具痕を認めることができるので、この擦痕も突帯の間隔を設定する工具の痕跡と思われる。突帯間隔は、底部である１段目が14.5cm、２段目・３段目はおよそ12.5cmである。

１・２段目では１次調整タテハケの後２次調整ヨコハケという手順を確認できる。２次調整のヨコハケは両段とも上下２段の２周回る。ヨコハケの静止痕についてみると、１段目の下段が垂直、上段が左傾気味であり、間隔は双方とも４～５cm程度である。２段目は、下段が右傾気味で間隔は３～４cm程度、上段は垂直もしくはやや右傾気味で４cm前後である。一瀬氏分類のＢｂ類に該当するものと思われる。３段目もヨコハケが上下２段に回り、段の中位に僅かながら左上がりのナナメハケがみられる。切り合い関係から下段ヨコハケ→ナナメハケ→上段ヨコハケの順で施されたものと考えることができる。下段ヨコハケの静止痕間隔は５～5.5cm程度、上段ヨコハケでは４～６cm程度である。４段目はほとんど残存していないため詳細は不明であるが、確認できる静止痕は左傾気味である。

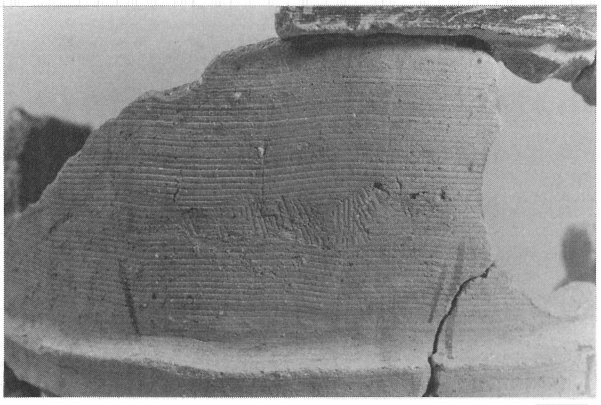
内面は、底部下端付近に指オサエが顕著にみられるほかは、タテハケもしくは左上がりのナナメハケの後に横方向の指ナデを施している。このナデは突帯裏面付近では非常に丁寧に施されるものの、それ以外では散漫なため、ハケメや粘土紐接合痕がよく残されている。３段目以上では様相が異なっており、２条目突帯に対応するヨコナデに切られる左上がりのナナメハケがあり、その一部が中位付近の粘土紐接合痕に潜り込んでいく状況を確認することができる。このナナメハケと粘土紐接合痕を切るタテハケが部分的に施されているが、そのタテハケは３条目突帯裏の



3 (24)

20cm

0



2段目外面調整

3段目内面調整

第14図　三嶋藍野陵　出土品実測図（3）円筒埴輪（1/4）

ヨコナデに切られている。３条目裏のヨコナデ以前に施されたナナメハケはナデの上側でも確認でき、タテハケと同じタイミングで施されたものと思われる。４段目内面となるこのナナメハケは別のタテハケによって切られている。確認できる調整の痕跡のうち、最後のタイミングで施されているのは、３段目の中位から４段目にかけての縦方向のユビナデである。粘土紐の太さは２～３㎝程度。

外面の現存部分上端から３段目までは赤彩されている。内面については、残存部分では認められない。工具幅内と思われる範囲でも顔料の濃い部分と淡い部分との差が激しく、斑模様となっている。顔料の濃淡によって知ることのできる工具幅は５㎝程度。顔料の淡い部分の状況や飛沫や液だれ痕などから、顔料が水っぽいものであったことが窺える。現在は暗茶褐色。

赤彩が及ばない部分は淡黄灰色を呈する。胎土には径２～10㎜の小礫が多く含まれている。

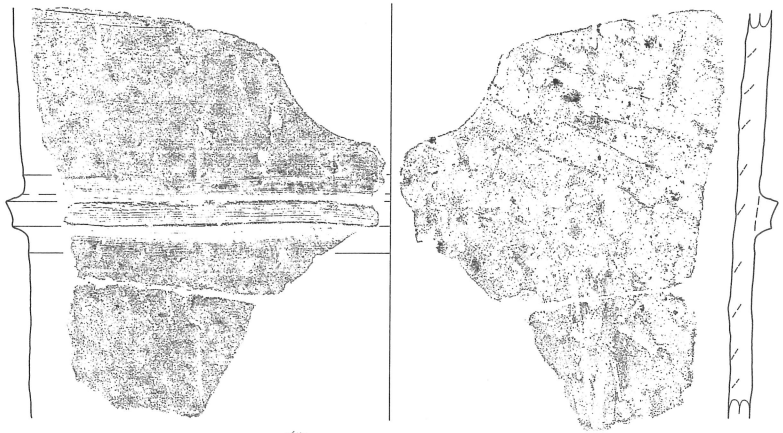
３～４段目内面に残された痕跡は、３段目中位以下のナナメハケ→２条目突帯内面ナデ→３段目中位以上の粘土紐積み上げ→同部分にタテ～ナナメハケ→３条目突帯内面ナデ→４段目タテハケ→３段目から上方へのユビナデ、という作業手順を示している。３段目中位に積み上げ休止ラインが存在することは明らかで、１～２段目内面に同様の痕跡が認められないことから、ここまでが粘土紐積み上げ単位であることも間違いないと思われる(8)。外面で認められる下段ヨコハケ→ナナメハケ→上段ヨコハケという手順も、３段中位以下２次調整→３段目中位以上１次調整→同２次調整と理解できるし、３条目突帯にのみ突帯間隔設定の痕跡が認められることも、４条目が３条目の整形以後に貼付されたことを示しており、全て説明がつくことになる。同様に３条突帯上面にのみＬ字状工具圧痕を持つ２も、同様の製作工程になるものと思われる。

これら３個体の埴輪のうち、１と２は『新池』分類のＩａ１類に該当する(9)。３も同様である可能性が高いが、上部が失われているために確言することはできない。特に２は全形を知ることができるため、ほかの出土資料の基準ともなる重要な資料といえよう。　　（有馬　伸）

４は、円筒埴輪の上半部で、直接の接合関係はないものの、最上段から３段分程度の破片が確認できる。図示した残存高は約37㎝、復元口径は約43㎝を測る。精良な胎土で、暗赤褐色～紫がかった赤褐色を呈する。赤彩は施されていない。口縁部付近の焼成は、非常に堅緻である。しかし、下にいくほど焼成は不良となり、色調も黄褐色へと変化する。同一層内から著しく摩滅した黄褐色の埴輪片が多く出土しており、これらがこの埴輪の胴部から底部となる可能性がある。器形は、胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部は湾曲しながら強く外反する。突帯の端部は非常にシャープで強い稜をもつ。外面調整は、最上段のうち、口縁端部が幅の広い指ナデ、それ以外はタテ～ナナメの板ナデ調整である。以下の段は、ヨコの板ナデ調整で、条痕は認められない。静止痕の間隔は約５㎝である。内面調整は、最上段に該当する範囲はヨコ～ナナメの指ナデ、以下の段はタテの指ナデ調整が施されている。

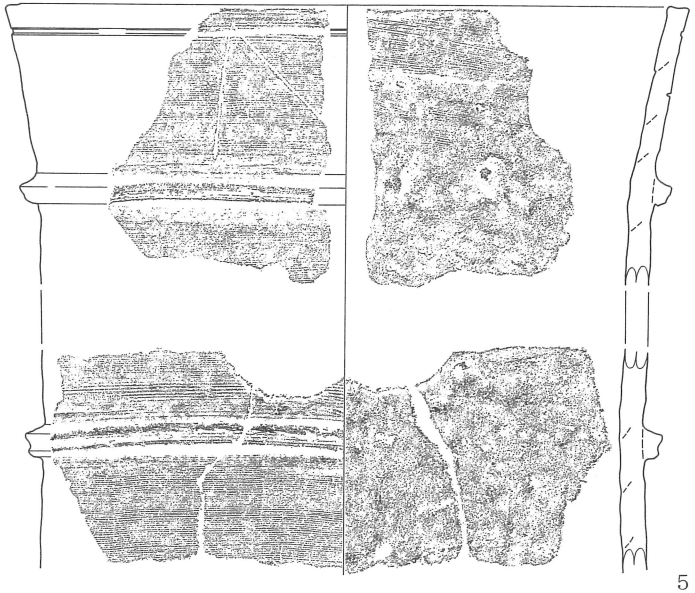
なお、本個体と同一個体と思われる胴部破片には、粗雑な格子状線刻文様が認められる。

５は、細かい破片が多く、破片どうしもあまり接合しないが、図示した残存高は約34㎝、復元口径は約30㎝である。確実に本個体の底部と思われる破片も認められない。比較的精良な胎土で、淡赤褐色～紫がかった赤褐色を呈する。赤彩は施されていない。焼成は比較的堅緻である。器形

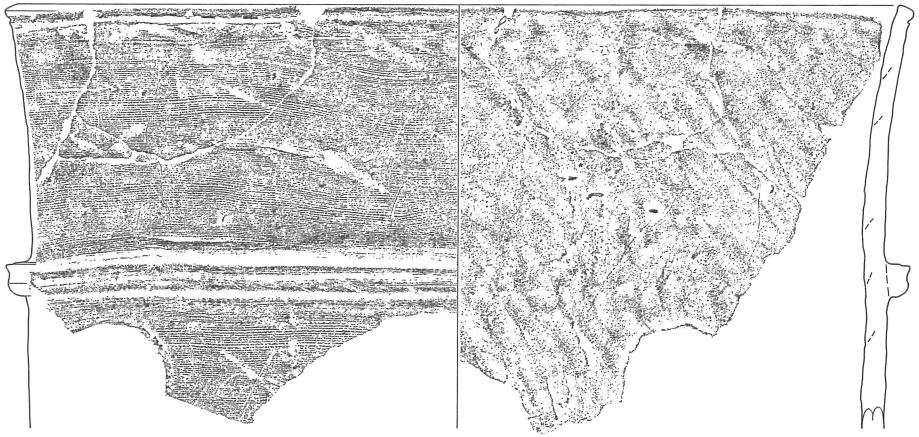


4 (12)

0 20cm

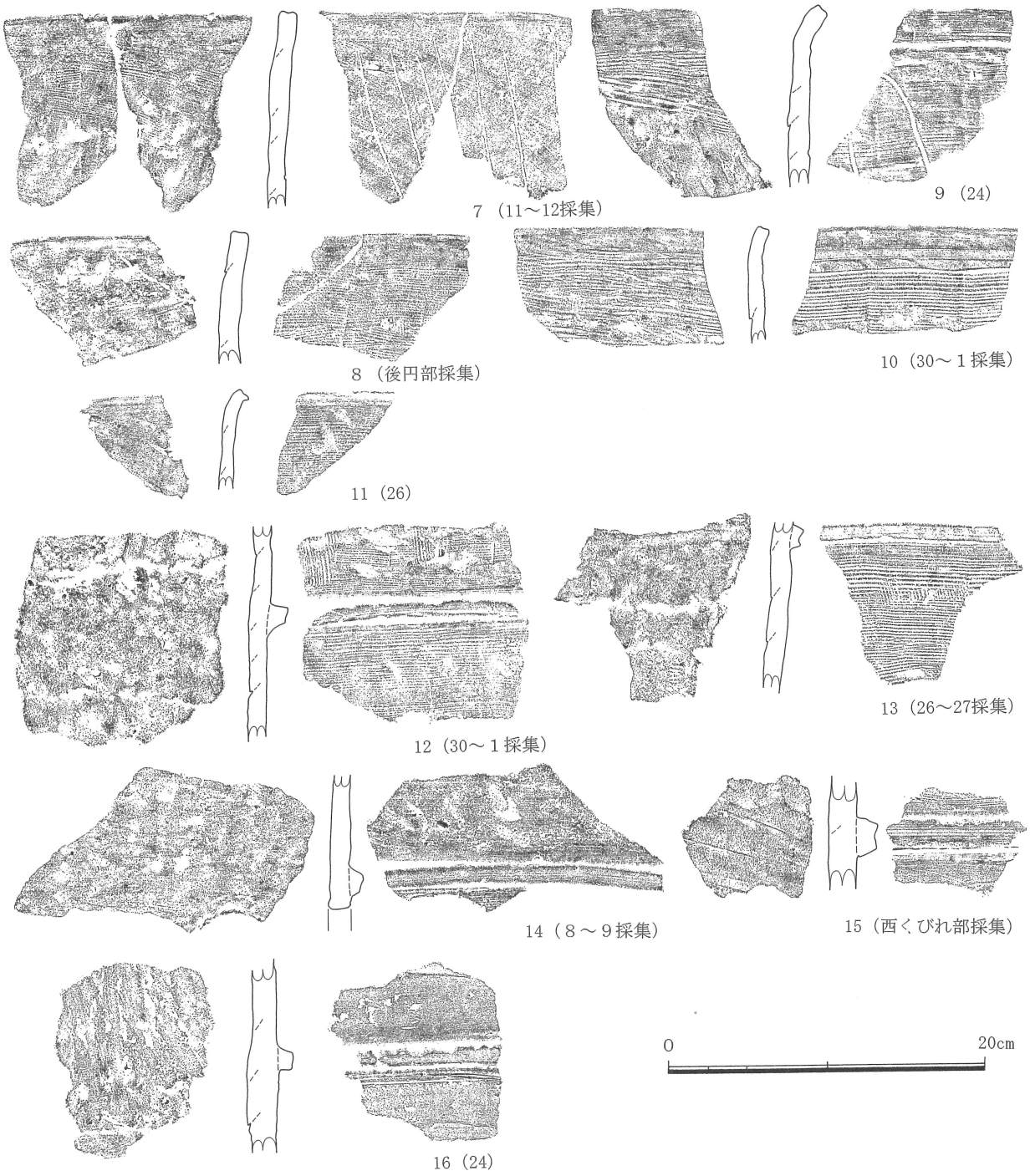


5 (10)



6 (12)

第15図　三嶋藍野陵　出土品実測図(4) 円筒埴輪 (1/4)

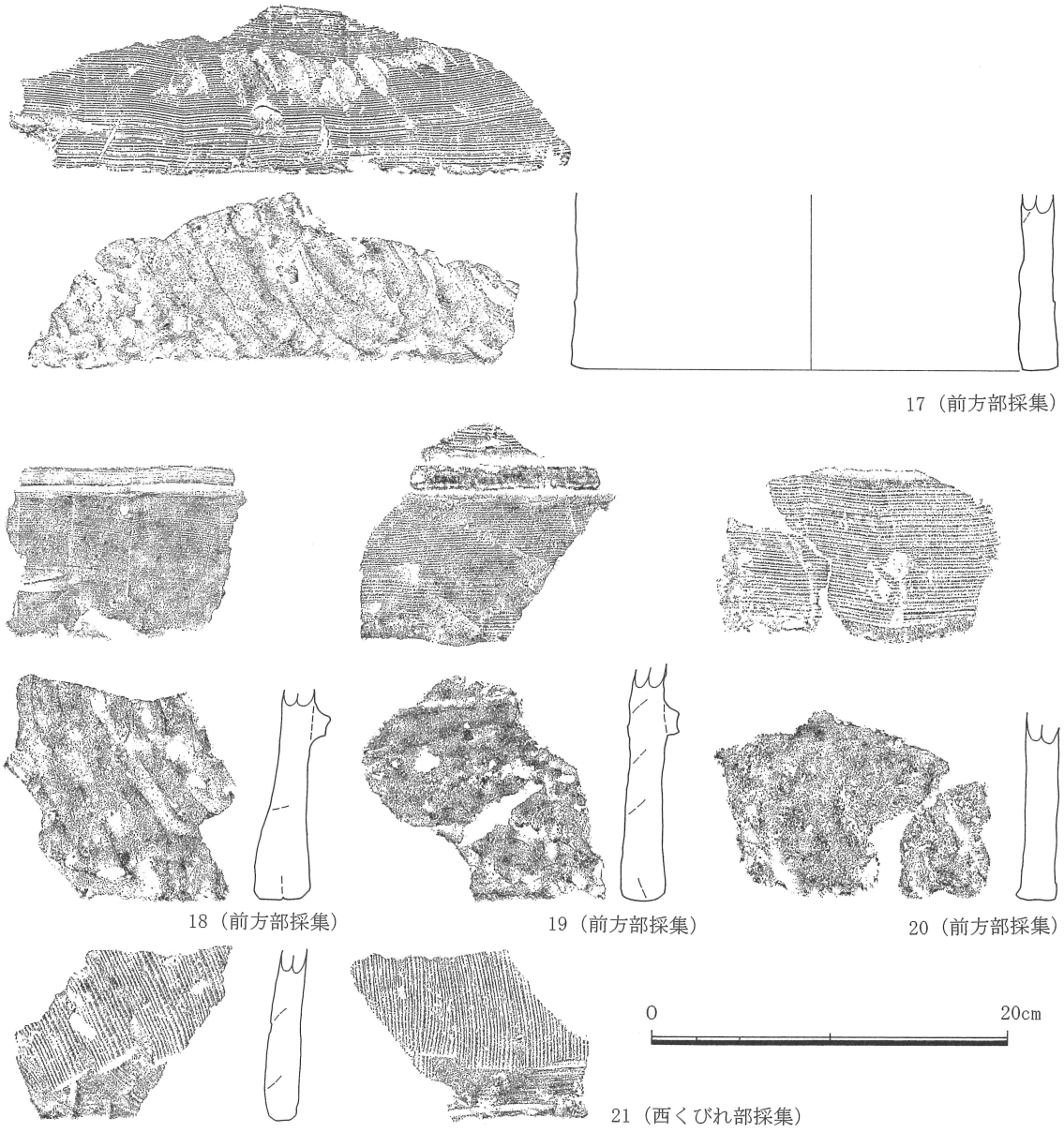


第16図　三嶋藍野陵　出土品実測図（５）円筒埴輪（1/4）

は、口縁部が直線的に伸び、僅かに外傾することが指摘できるが、他の部位は不明である。突帯は、上端が強い稜をもつが、下端は丸みをもち、稜は認められない。外面調整は、確認できる範囲はすべてヨコハケである。静止痕間隔は約４cmであるが、静止痕が確認できない箇所も多い。また、端部付近に幅２～３mmの沈線が廻る。内面調整は、口縁端部付近のみヨコハケで、それ以外ではナナメ～ヨコのやや粗い指ナデ調整である。

なお、口縁部には、現状で傾いた鋸歯状の線刻文様が確認できる。

６（図版８－２）は、口縁部を中心に大形の破片が認められるが、口縁部より下で接合関係が認められないため、どの程度残存しているかは不明である。図示した破片の残存高は約22cm、復



第17図　三嶋藍野陵　出土品実測図（6）円筒埴輪（1/4）

原口径は約46cmを測る。比較的精良な胎土で、色調は茶褐色を呈する。赤彩を施しており、その色調は暗茶褐色～濃い紫色である。焼成は堅緻である。器形は、胴部については不明瞭だが、口縁部は直線的に立ち上がりながら、僅かに外傾する。突帯は、上端がやや突出し、稜をもつが、下端は丸く仕上げられている。外面調整は、ヨコハケである。やや波打ちながら廻っており、静止痕間隔は不明である。また、外面の端部付近には幅２㎜の沈線が廻る。内面調整は、ナナメの指ナデである。

７～11は円筒埴輪の口縁部である。７・８に示した口縁部の断面は、ほぼ直立するもので、今調査出土の円筒埴輪の口縁部形態としては、もっとも普遍的なものである。９～11に示したものは、口縁端部が外側に屈曲するものである。９・10は、端部から２㎝ほどのところで、屈曲する。

11は、端部から１㎝ほどのところで屈曲するが、屈曲点はやや不明瞭である。薄手の作りで、端部も、外側にやや強くつまみ出す点が特徴的である。基本的に、口縁部の端面は、中央がやや

窪みながらも、ほぼ平坦に仕上げられており、11の諸特徴は、他の多くの埴輪の特徴とは異なる印象を受ける。また、７には平行線の線刻文様、９には楕円形の一部と考えられるような線刻が確認できる。８～11は内外面に赤彩を施す。

12～16は胴部の破片である。基本的に直線的に立ち上がる形態を示すと考えられる。調整は、最終的にヨコハケで終えている。静止痕の間隔は短いと３㎝程度で、５㎝前後がもっとも多い。極端に間隔のあく例は少ない。突帯の断面形は、幅や突出度の違いはあるが、M字形を呈するものが多い。13などは、突帯の端部に鋭い稜が認められる。また、15のように幅の広いものも少数ながら認められ、大形の製品であった可能性が考えられる。16は、透孔の形状が長方形と考えられるもので、今調査では唯一の出土である。外面調整はヨコ板ナデ、内面調整はタテ指ナデである。

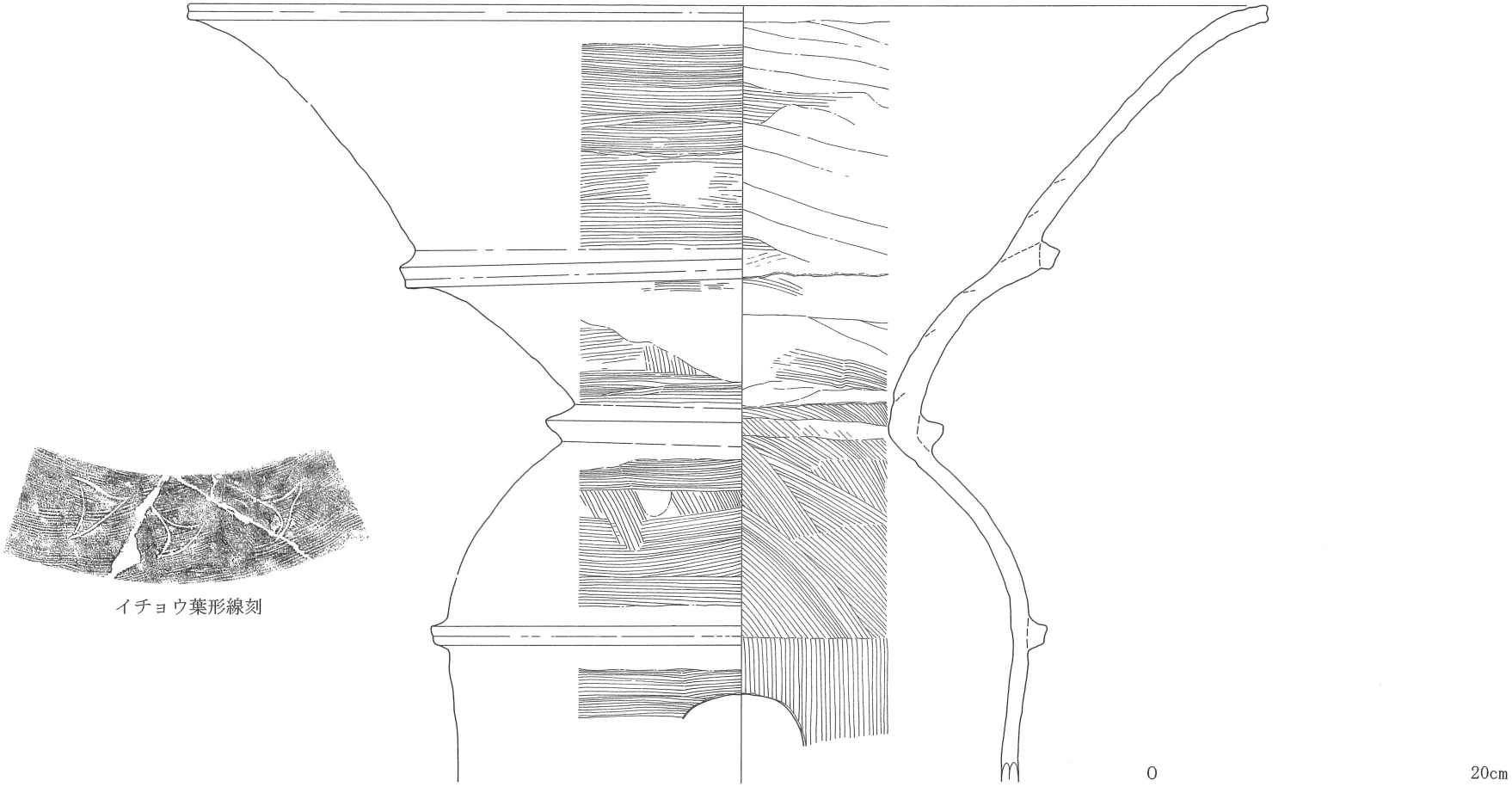
17～21は、底部の破片である。17は復原底径約28㎝である。各個体とも、高さに乏しいため判然としないが、基本的には、ほぼ垂直に立ち上がる器形を示すと考えられる。底面から１条目突帯までの間隔は、18・19で10.5㎝であり、２・３よりは狭くなっている。外面調整については、タテハケの後、最終的にヨコハケを施す例が圧倒的に多い中で、21はタテハケのみである点が注意される。内面調整は、基本的に指ナデである。

朝顔形埴輪（第18図22～第19図29）

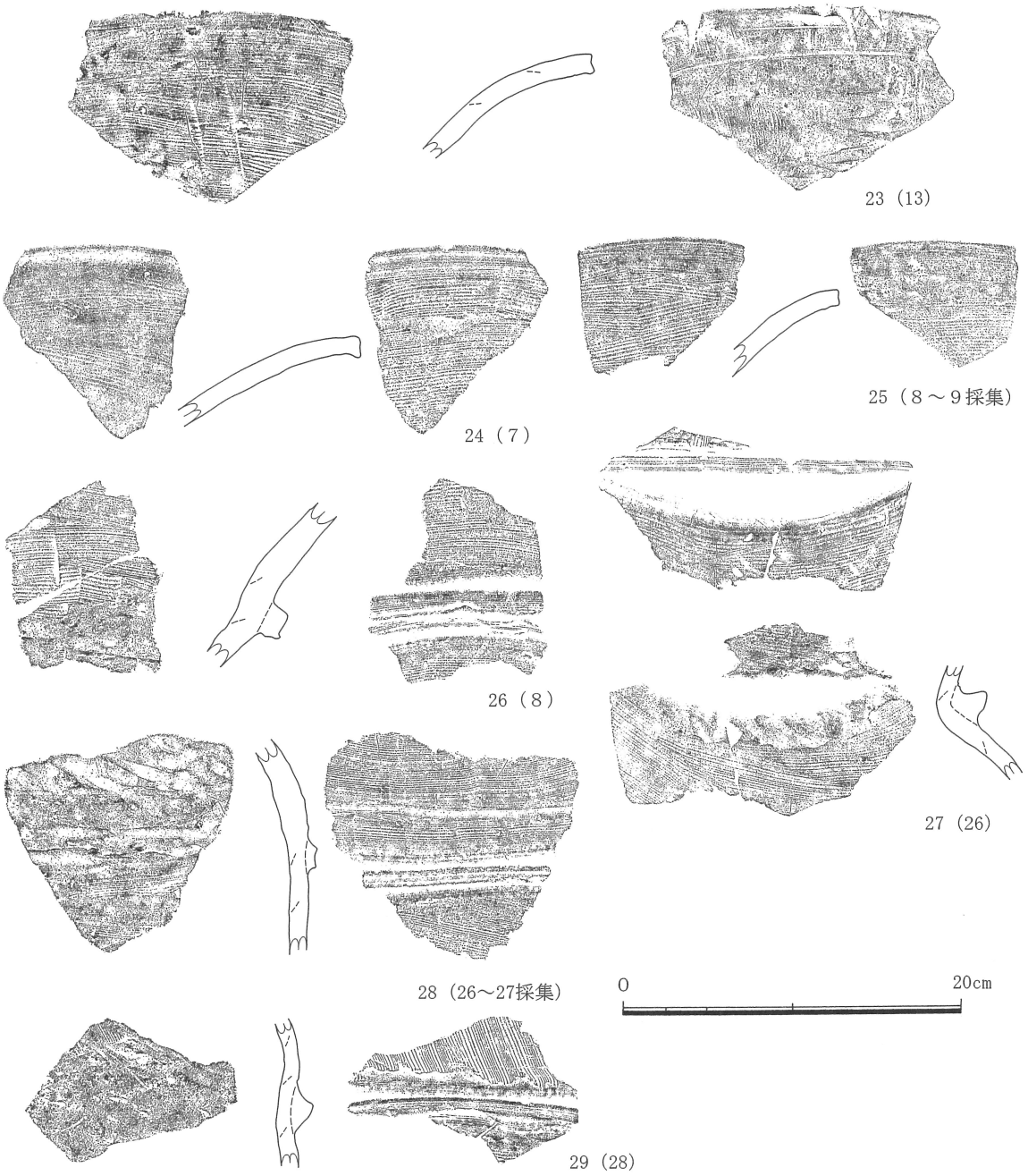
22（図版８－３）は、肩部より上位の形状が判明する資料で、残存高が約48㎝、復原口径が約66㎝である。精良な胎土で、紫がかった灰褐色を呈する。焼成は良好で、肩部より上位は堅緻であるが、胴部以下は、急に接合する破片がなくなる。円筒埴輪の焼成の状況も考え併せると、焼成不良で軟質であった可能性が高い。本個体の近くでは摩滅の激しい底部の破片が出土しており、本個体の底部であった可能性がある。器形は、ほぼ直立すると考えられる胴部から、肩部に至るが、肩部上位はやや直線的であるため、丸みに乏しい。１次口縁は比較的強く外反し、２次口縁が接合される。２次口縁の下位は、やや直線的に立ち上がるが、端部に近づくにつれて緩やかに外反する。調整は、胴部が、外面はヨコハケで、内面はタテハケである。外面のヨコハケは、静止痕の間隔が残存部位からは確認できないため、比較的その間隔の広いことが想定される。肩部は、外面がナナメハケの後ヨコハケ、内面がナナメハケである。口縁部は、１次口縁・２次口縁の内外面とも、タテハケ・ナナメハケの後にヨコハケを施す。静止痕間隔は１次口縁で３～４㎝、２次口縁で５～６㎝である。そして、最終的に口縁部の大半の範囲を、指ナデで仕上げる点が特徴的である。

なお、本個体の肩部には、イチョウの葉のような形の線刻文様が、３つ並んで確認できる。

今調査では、22を除けば、全体の形状を窺い知ることのできる資料は他になく、小破片ばかりとなる。23～25は、口縁端部である。比較的緩やかに外反する。端部は僅かにつまみ出すが、鋭い稜はなく、丸く仕上げられている。調整は、内外面とも、最終的にヨコハケかナナメハケで仕上げられ、23ではヨコハケ前のタテハケの痕跡が確認できる。26は、１次口縁と２次口縁の境にあたる。１次口縁との接合部では顕著な屈曲を示さない。調整は、内外面ともヨコハケである。27は、１次口縁と肩部の境、28・29は肩部付近の破片である。調整は、内外面ともヨコハケ、あ



第18図　三嶋藍野陵　出土品実測図（７）朝顔形埴輪（1/4）



第19図　三嶋藍野陵　出土品実測図（8）朝顔形埴輪（1/4）

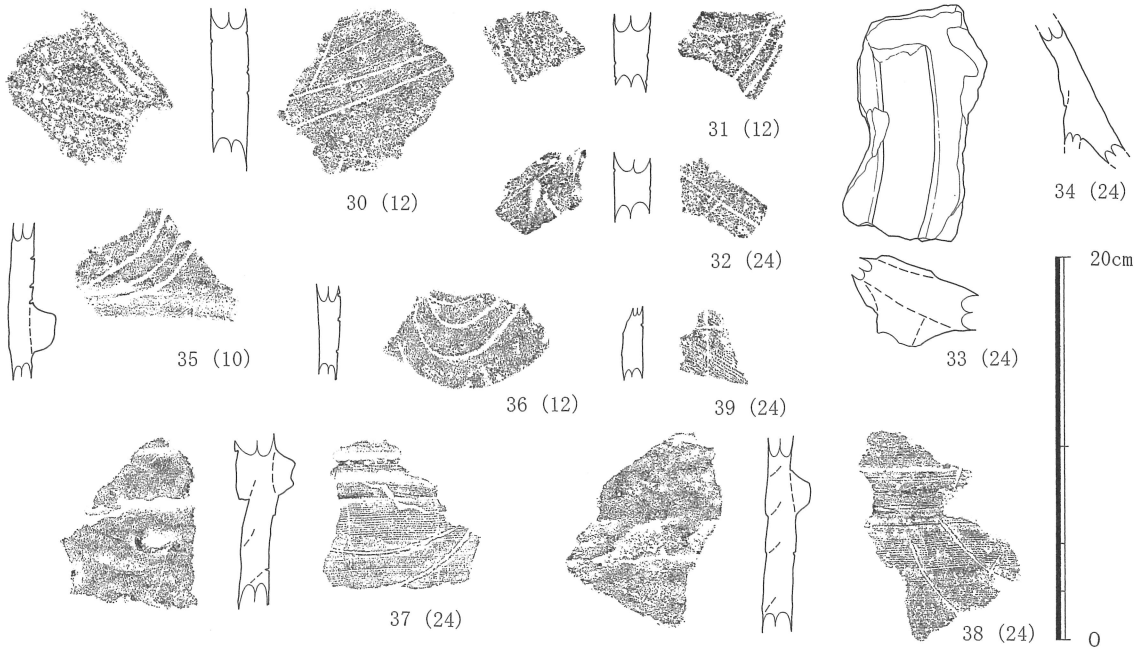
るいはナナメハケを基本とするが、28・29のように、肩部内面を指ナデで仕上げるものもある。

形象埴輪（第20図30～34、図版9－2）

形象埴輪と考えられる破片は、僅か7点であり、多量の埴輪が出土した第12・24トレンチでもほとんど確認されていない。また、確認されたものも、小破片ばかりである。

30～32は蓋形埴輪の立飾りである。弧状の線刻が確認できる。全体に摩滅が著しい。33は、蓋形埴輪の笠部で、台部との接合部の破片である。摩滅が著しいが、幅約3㎝の突帯が確認できる。これら蓋形埴輪の破片は、同じ赤褐色を呈し、胎土もよく似ている。

34は、台部にやや傾斜のきついスカート状の部位が接合した破片である。外面は、摩滅のために調整不明である。内面は、ナナメの指ナデが確認できる。器種は不明である。推定される径が



第20図　三嶋藍野陵　出土品実測図（９）形象埴輪・線刻のある埴輪（1/4）

小さいため、判断が難しいが、水鳥形埴輪の羽、あるいは短甲形埴輪の草摺部分の可能性が考えられよう。

その他、家形埴輪と考えられる破片などもあるが、いずれも摩滅が激しいなど、残存状況が悪く、図化しえなかった。

線刻のある埴輪（第20図35～39、図版９－３）

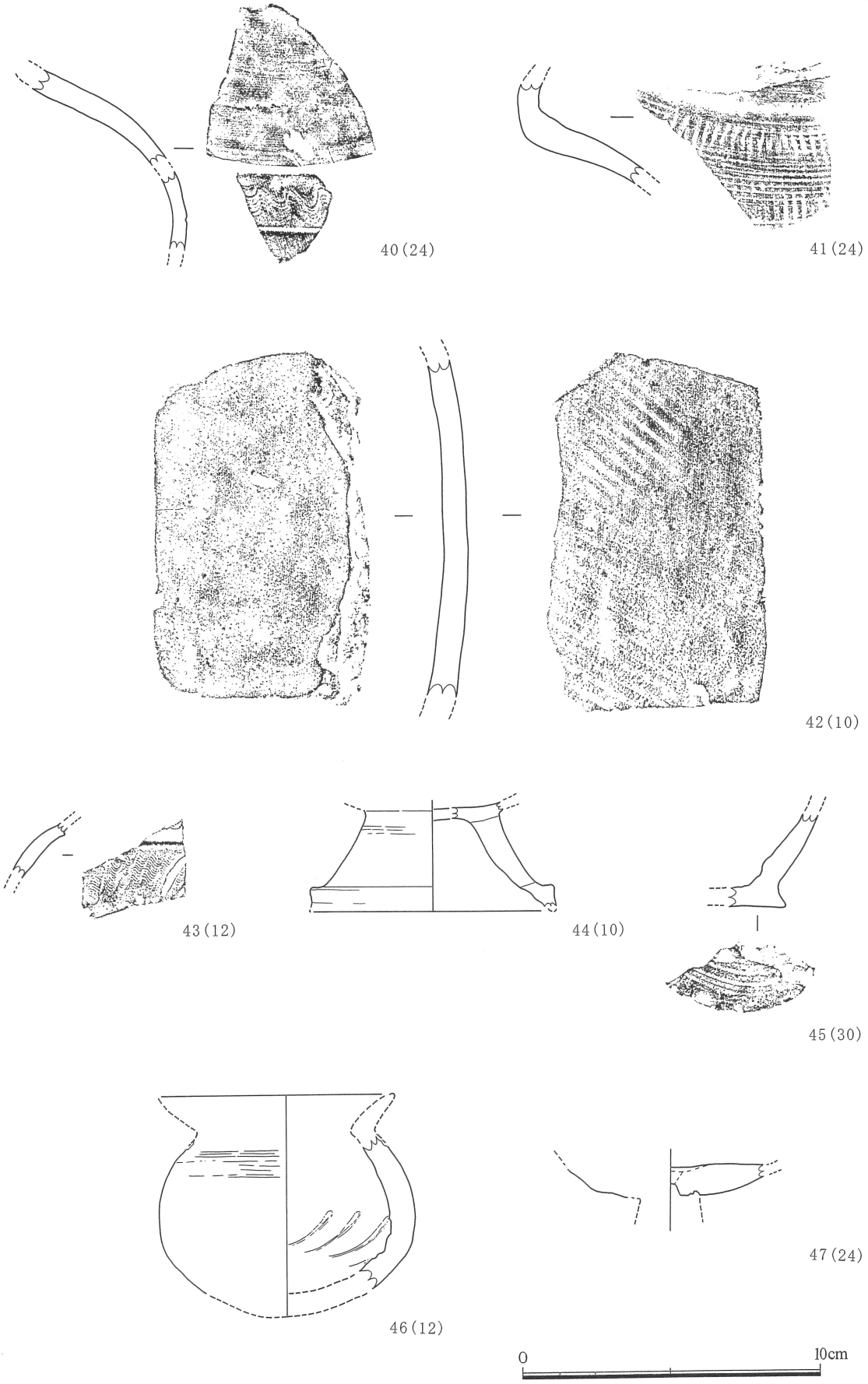
既に、これまで詳述してきた埴輪にも、幾つかのヘラ記号や線刻が指摘できたが、線刻の残る破片は、他にも確認されている。しかし、破片の大きさが十分でないため、線刻文様の全体が判明するものは、ごく僅かである。35・36は、弧状の線刻が複数本並列された文様で、ともに全体が判明するが、同様の線刻と考えられるものの多くは細片である。しかし、破片の数から考えると、今調査で確認された線刻の中では、もっとも普遍的な文様であると言える。35は、円形透孔の円弧に沿うように施され、36は、円形透孔の横に、透孔の円弧とは別に施されている。37は、弧状の線刻が２本確認できる。各線刻の端部が接するため、35の文様とは別種になると考えられる。しかし、欠損部があるため、何を描いたものかは不明である。38は、37の文様に、施文位置や工具が類似するが、弧状線刻はそれぞれ平行関係で、さらに上の弧状線刻からは、直交する方向に別の線刻が施されており、単純なヘラ記号のようなものではない可能性が考えられる。39は、細片であるが、２本の直線が直交しており、格子状文様の一部かと思われる。　（清喜裕二）

（２）　土器（第21図）

土器類としては、須恵器、土師器が出土した。以下、須恵器から順に詳述していく。

須恵器（第21図40～45）

須恵器片は合計23点出土しているが、大半は濠内堆積土（III層）から出土したものであり、第21図40に示した１点のみが、第24トレンチの原初の堆積層（VI層）から出土した。すなわち層位的な検討から本陵に伴う須恵器として理解できるものとしては本個体のみである。形状から短頸壷、



第21図　三嶋藍野陵　出土品実測図(10)(須恵器・土師器)(1/2)

もしくは瓶と考えられるが、口径・胴部径を求めることは不可能である。外面には１条の沈線と波状文が認められ、恐らく肩部あたりの破片であろうと思われる。外面の色調は一部セピア色を呈する灰色であり、焼成はやや軟質である。本個体は、大阪陶邑古窯跡出土須恵器の型式編年観に準拠した場合、ON46型式として、特に違和感のない個体である。

その他の須恵器については小破片の個体が多く、そのうち41は40と同じく第24トレンチから出土した壷の頸部から肩部にかけての破片である。口径等の大きさを求めることはできない。色調は暗灰色を呈し、通常の焼成である。外面にはタタキ調整痕とカキ目文様があり、内面には同心円文を呈するあて具痕が認められる。

42は大甕胴部の破片であると考えられ、第10トレンチの墳丘崩落土(IIａ層)から出土した個体である。器厚は0.8cmを測り、外面にはタタキ痕を残す。内面にはあて具痕が観察されず、ナデ消してあるように見える。外面の一部に自然釉が附着しているために暗灰色を呈するが、他は断面を含めて灰色である。焼成は通有である。この41・42に示したものは、表土近くから出土しているため、本陵に伴う須恵器か否かについては不明である。

43は第12トレンチの墳丘崩落土(IIａ層)から出土した。短頸壷もしくは瓶の頸部と思われる破片であり、波状文とへら記号状の刻線が認められる。

44は低脚高坏の脚部であり、現存高約4.0cmを測る。３方向に長方形のスカシ孔をもつようである。全体に回転ナデ調整が施されており、色調は明灰色を呈する。本個体は前述した須恵器に比べ、胎土が精良であり色調も異なり、さらには第10トレンチの濠内堆積土(IIIａ層)から出土したことを併せて考えると、所属時期が異なる可能性が高い。45は壷の底部と考えられる小破片であるが、底径を復元することは難しい。底面には回転糸切り痕が認められ、第30トレンチの濠内堆積土(IIIａ層)から出土したことから、本個体の所属時期は古墳時代以降であることが考えられる。

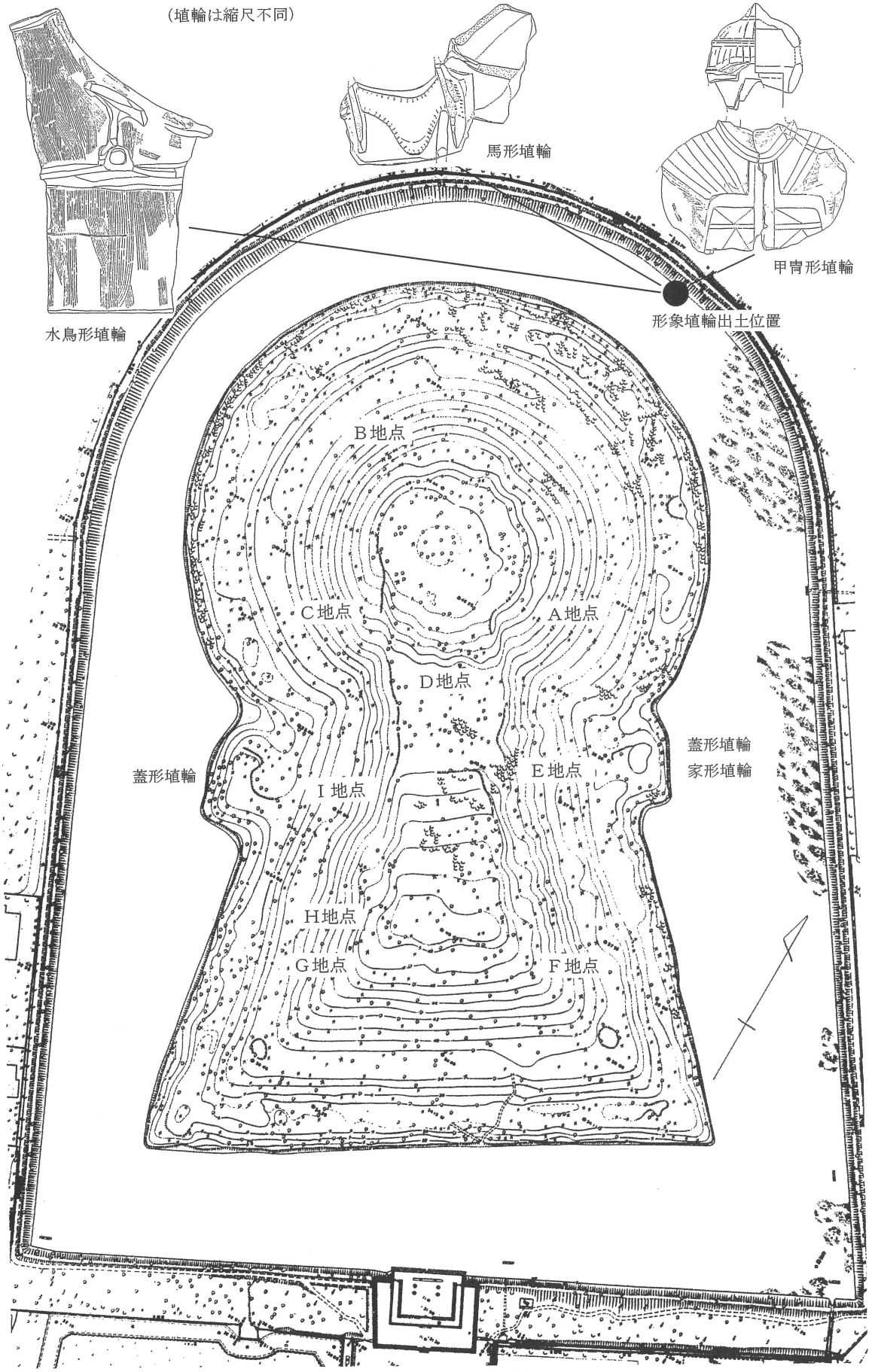
土師器（第21図46・47）

土師器は極めてわずかの点数(13点)しか出土しておらず、原初の堆積層から出土した個体は皆無である。図化した土師器のうち第21図46に示したものは、第12トレンチの濠側表土近くから出土した個体である。口縁部を欠いているが、形状から小形の坩であろうと考えている。表面の調整は摩耗のため明瞭ではないが、内面にはユビナデの痕跡を残す。本個体は層位的な観点から本陵に伴うか否かを明らかにすることはできないが、造出近くから出土していることは、あるいは造出における祭祀に使用された可能性も考えられよう。

47は裏面に脚部が取り付けられていた痕跡を残すことから、高坏の脚部片であると考えられる。全体に摩耗が激しく、調整などはまったく観察できない。この土師器は第24トレンチの地山直上の土層から出土したが、46と同時期の所産であるか否かは判断できない。　　（徳田誠志）

４　墳丘の構造

ここで墳丘形態について若干触れておきたい。当陵の墳丘については後円部・前方部とも３段築成であるとする考えが一般的であるが[10]、その一方で４段築成とする見解も古くから存在し



第22図　三嶋藍野陵　段築状況および形象埴輪出土位置図（1/1500）

ている[11]。これらのことを踏まえ今次調査中に墳丘を観察した結果、後円部・前方部ともに現在３段目と考えられている斜面上に平坦面が存在することを確認した。以下、陵墓地形図を基に概略を説明する（第22図）。

後円部では３段目斜面の上よりで平坦面の存在を確認した。陵墓地形図を見ても東くびれ部（図中Ａ地点）から後円部北西側（Ｂ地点）にかけて標高45mと46mの等高線の間隔が広く、ここに平坦面が存在することは明らかである。Ｂ地点から西くびれ部（Ｃ地点）方面にも平坦面は引き続き存在しているが、地形図では45～47mの等高線間隔が44m以下に比して若干広く表現されている程度で明確ではない。この平坦面は両くびれ部で途切れており、後円部前面（Ｄ地点）側には回り込んでこない。Ｄ地点付近の墳丘は円弧を描かず若干帆立貝形に張り出しており、その前面は人為的に削られたかの如く急傾斜となっているので、この現状からすれば、今回確認した平坦面が後円部最上段を全周するのは難しいものと思われる。

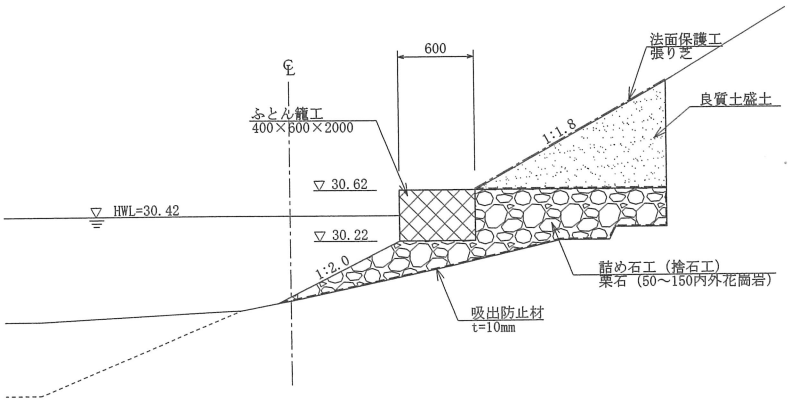
一方の前方部では、前面（Ｆ地点～Ｇ地点）において標高46～48mの等高線間隔が広く表現されており、平坦面の存在が示されている。図上では確認し難いが、この平坦面は東側面にそのまま回り込んでおり、前面に比して幅を減じるもののＥ地点で鞍部上平坦面にスムーズにつながっている。これに対して前方部西側面では、平坦面が側面に回り込むところまでは同様であるが、その直後のＨ地点から急激にレベルを下げながら狭まってゆき、くびれ部手前のＩ地点で現３段目斜面に飲み込まれて消滅する。さらにＨ～Ｉ地点間では、平坦面下の斜面裾が張り出し、２段目平坦面の幅が狭まっているように観察される。この西側面については、高低差を持つ平坦面は後世に付加されたものと理解し、平坦面下における斜面の状況を、その構築時に排土を押し流した結果と捉えることも可能であろう。一方で、同じ様に平坦面が存在する東側面においては斜面や２段目平坦面に乱れは観察されない。このことを重視すれば、Ｈ～Ｉ地点間の墳丘が地滑りを起こしたという想定も可能である。この想定をとれば前方部の平坦面は最上段墳丘の周囲を「コ」字形に巡っていたことになる。

今回確認した平坦面は１段目や２段目の平坦面に比すると幅が狭いように感じられた。ただし、観察したのみで計測などを行った訳ではないので具体的な数値で明示することはできない。

この平坦面が古墳本来のものなのか、あるいは後世に付加されたものであるのかについては、俄には決しがたい。大阪府堺市所在の仁徳天皇陵の後円部が４段築成であるらしいことは類例となる可能性がある[12]。今次調査で後世のものと思われる遺物の出土が皆無といっていい状況であったことは、墳丘の２次利用やそれに伴う大規模な改変の可能性が低いことを示している。一方、先に触れた後円部Ｄ地点の形状以外にも、鞍部平坦面の周囲の現状は、前方部最上段上面スロープとの間にカットされたような段差が存在することや、鞍部平坦面自身が削平を受けた如くに平坦であることなど、後世の改変を思わせる。今回確認した平坦面も鞍部平坦面に近く、一連のものである可能性もある。今後の類例の増加などに注意を払いたい。

なお、かつて後円部墳頂に存在した盗掘坑の痕跡は全く認められず、そこに存在したという石材も確認することはできない[13]。

（有馬　伸）



第23図　三嶋藍野陵　墳塋裾護岸工事設計図(1/60)

まとめ

これまで記述してきた内容の要点を列挙し、まとめとしたい。

・墳丘裾に設定したトレンチにおいては、護岸工事に支障となる遺構は検出されず、本来の第１段斜面はすでに崩壊しているものと判断できる。よって護岸工事は第23図に示したフトン篭工法を採用することとした。

・現在墳丘裾に散在している石材は、本来は地山(富田礫層)に含まれていたものである可能性が高く、少なくとも墳丘第１段斜面には葺石は検出されなかった。しかしながらフトン篭の中、および砕石に使用する石材は家島諸島男鹿島産の花崗岩とし、富田礫層には存在しない石材を採択した。

・今回調査した墳丘裾の各トレンチとも、標高29.2±0.2mあたりで濠内の地山に傾斜変換点が認められた。しかしながらこの傾斜変換点付近では原初の堆積層はなく、また遺物もほとんど出土しないことから、いつの時期かは明らかでないが、本陵の濠には浚渫行為が施されている可能性が高いと判断している。今回の調査によって本来の墳丘裾を明らかにするような情報は得られていない。

・くびれ部における後円部と造出の状況の一端が明らかになった。東側(第12トレンチ)は非常に狭い谷状地形であったことが確認され、西側(第24トレンチ)は東側に比べると、後円部と造出の間隔が広いことが判明した。くびれ部は必ずしも左右対称の形態ではないことが推定される。

・第10トレンチの第１段テラス面で、樹立間隔が密な埴輪列を検出した。

・出土遺物の大半は埴輪である。円筒埴輪が中心を占め形象埴輪は僅かな量にとどまる。古代～近世の遺物は僅少である。また、埴輪は本陵の北東に位置する新池窯で焼成されたものである。

・出土した須恵器のうち、原初の堆積層から出土した個体は１点であるが、この須恵器の示す型式学的な編年観では、ON46型式に属すると考えている。

・本陵に対する調査は、外堤を中心に過去にも行われ、形象埴輪等が出土している(本誌第39・40号参照)。今回の調査分と併せ、主なものの位置を第22図に示した。部分的なトレンチ調査ではあるが、外堤側に甲冑・馬・水鳥・人物など形象埴輪の集中する箇所があることが注意を

ひく。一方、今回調査の墳丘側では、造出周辺でも形象埴輪は少なく、種類も外堤側とは異なる。現状が、ただちに本陵の埴輪組成と樹立位置を反映するものではないが、一定の傾向を示唆する可能性を指摘しておきたい。　（徳田誠志・清喜裕二・有馬　伸）

註

（1）　森田克行編『新池　新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第17冊）、高槻市教育委員会、1993年。

（2）　本陵出土埴輪の観察と分析にあたっては（財）和歌山県文化財センター藤井幸司氏より非常に多くのご教示を受けた。記して感謝の意を表します。

（3）　一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅴ』、大阪府教育委員会、1988年。

（4）　鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』、奈良市教育委員会、1998年。

（5）　三木　弘『土師の里遺跡－土師氏の墓域と集落の調査－』（『大阪府埋蔵文化財調査報告』1998-2）、大阪府教育委員会、1999年。

（6）　註１に同じ。

（7）　『新発見考古速報展－発掘された日本列島2004』にて展示中の実物を実見。

（8）　藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究－窖窯焼成導入以降を中心に－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会、2003年。

（9）　註１に同じ。

（10）　高島　徹「継体天皇陵古墳」大塚初重ほか編『日本古墳大辞典』、東京堂出版、1989年。

北條芳隆「太田茶臼山古墳（伝継体陵古墳）」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1992年。

森田克行「第26代　継体天皇陵（太田茶臼山古墳）」『「天皇陵」総覧』（歴史読本特別増刊事典シリーズ19）、新人物往来社、1993年。

など。

（11）「池之山之由来書」［『三島藍野陵開成王墓沿革』（陵墓調査室C2-26）］に所収される享保10（1725）年５月に太田村の庄屋が奉行所に提出した書状には「五年以前繪圖書付差上候所、少々絵圖面間数等相違仕候、山之段三段有之、山之上之所ニ四段有、惣根廻　三百五拾間、中段根廻　三百拾四間、上段根廻　貳百四拾八間、山之上根廻　七拾三間、山之上平廻　六拾間、長五六尺幅五尺同貳尺程宛有之石四ッ、外ニ小石一ツ有之、竹垣廻り　三拾貳間、内ニ穴」とある。後円部のみ４段築成とみたものであろう。

石田茂輔氏も後円部４段築成説を採っている。

石田茂輔「三嶋藍野陵（みしまのあいののみささぎ）」『国史大辞典』第５巻（け～こほ）、吉川弘文館、1985年。

ほかに４段築成説を採るものとして、

上野竹次郎「継体天皇三島藍野陵」同編『山陵（新訂版）』、名著出版、1989年。原著は1924年発行。

がある。

なお、奈良大学大学院遠藤啓輔氏よりＷ・ゴーランドも４段築成説を採っているとのご教示を得た。記して感謝の意を表します。しかし、その墳丘復原図は現状とは大きく異なっている。

Ｗ・ゴーランド「日本の初期天皇陵とドルメン」同（稲本忠雄訳・上田宏範校注）『日本古墳文化論－ゴーランド考古論集』、創元社、1981年。原題はThe burial mounds and dolmens of the early Emperors of Japan、Journal of the Royal Anthropological Institute、vol.ＸＸＸⅦ、1907年。

（12）　徳田誠志・清喜裕二「仁徳天皇　百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査及び出土品」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。

（13）　盗掘坑や石材の存在は註(11)にあげた庄屋の書状でも明らかである。

なお、蒲生君平は文化５（1808）年刊の『山陵志』の中で「大田村古冢此也。呼為茶臼山。以其頂有凹處名之也。」と延べ、「茶臼山」という呼称が盗掘坑の存在に由来すると考えている。

1　三嶋藍野陵　第12トレンチ　全景

2　三嶋藍野陵　第12トレンチ　埴輪出土状況

図版 2

1　三嶋藍野陵　第10トレンチ
全景

2　三嶋藍野陵　第10トレンチ
埴輪列出土状況

3　三嶋藍野陵　第12トレンチ
埴輪出土状況（後円部上から）

1　三嶋藍野陵　第12トレンチ
埴輪出土状況詳細

2　三嶋藍野陵　第24トレンチ
全景

3　三嶋藍野陵　第24トレンチ
埴輪出土状況

図版４

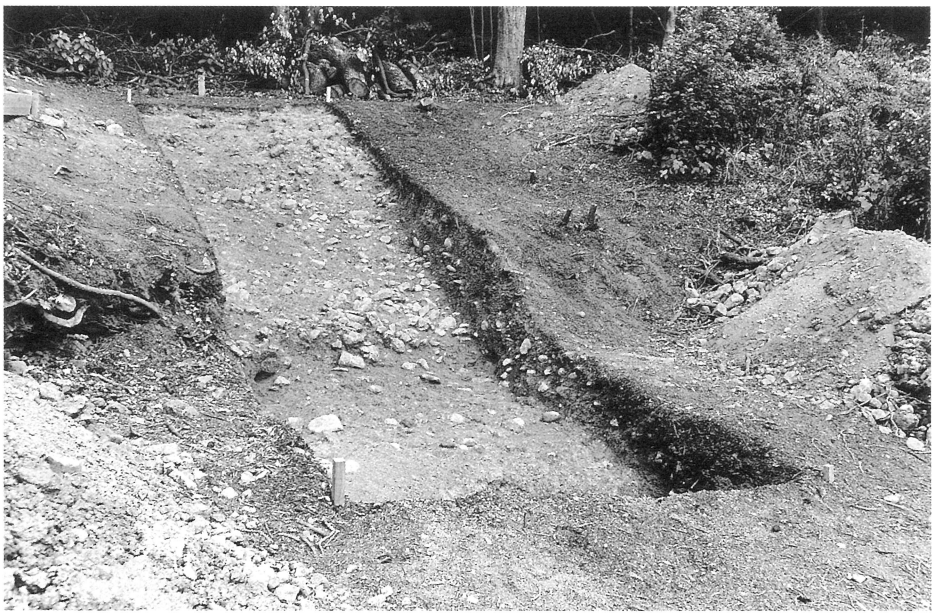
1　三嶋藍野陵　第24トレンチ
円筒埴輪２出土状況

2　三嶋藍野陵　第３トレンチ
全景

3　三嶋藍野陵　第３トレンチ
第１段テラス断ち割り箇所断面

1　三嶋藍野陵　第16トレンチ
全景

2　三嶋藍野陵　第18トレンチ
全景



3　三嶋藍野陵　第26トレンチ
全景

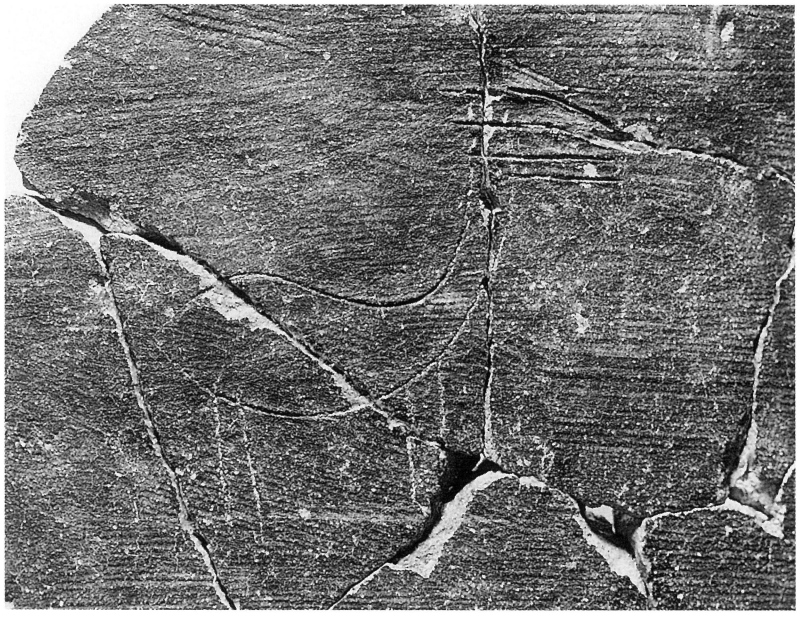
図版 6

1　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 1（部分）

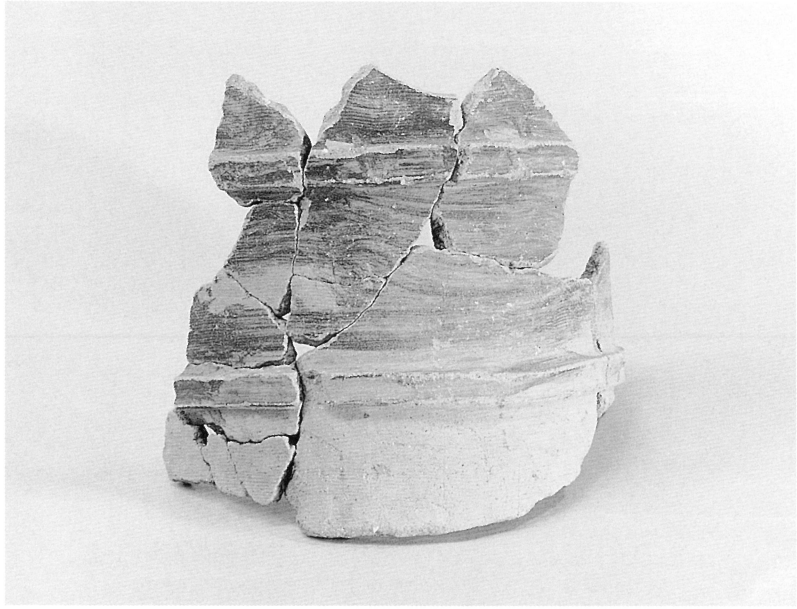
2　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 1（鹿線刻詳細）

3　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 2（上半部）

1　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 2（下半部）



2　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 2（鹿線刻詳細）



3　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 3（上半部）

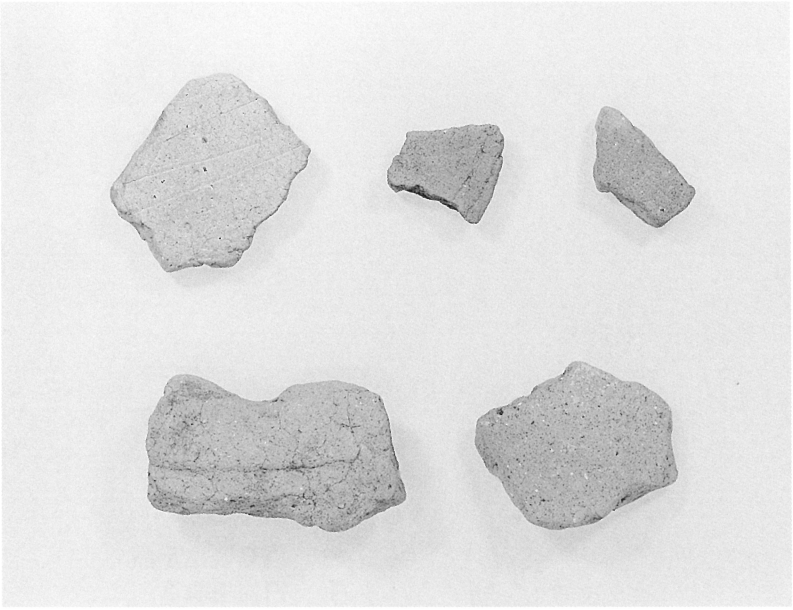
図版 8

1　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 3（下半部）

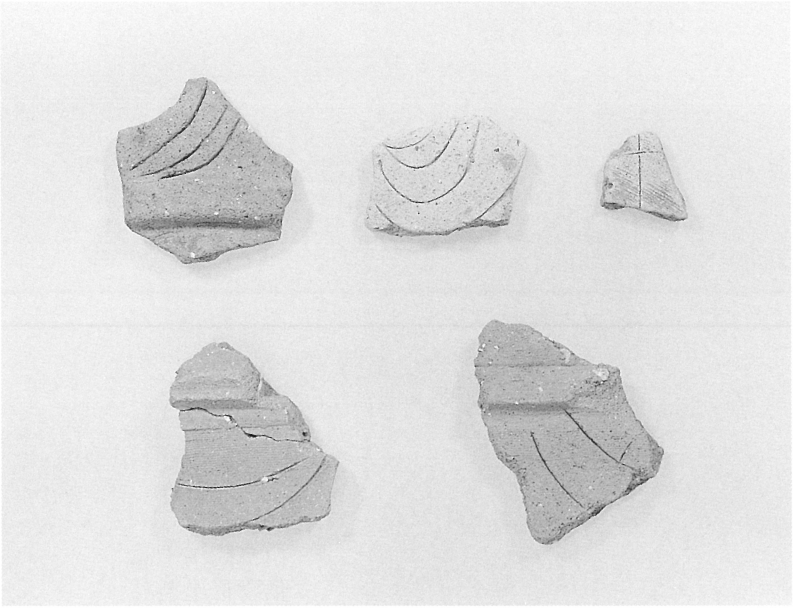
2　三嶋藍野陵出土品
円筒埴輪 6

3　三嶋藍野陵出土品
朝顔形埴輪22

1　三嶋藍野陵出土品
朝顔形埴輪22
（イチョウ葉形線刻詳細）



2　三嶋藍野陵出土品
形象埴輪30～34



3　三嶋藍野陵出土品
線刻のある埴輪35～39